

日本武尊能褒野墓整備工事予定区域の事前調査

はじめに

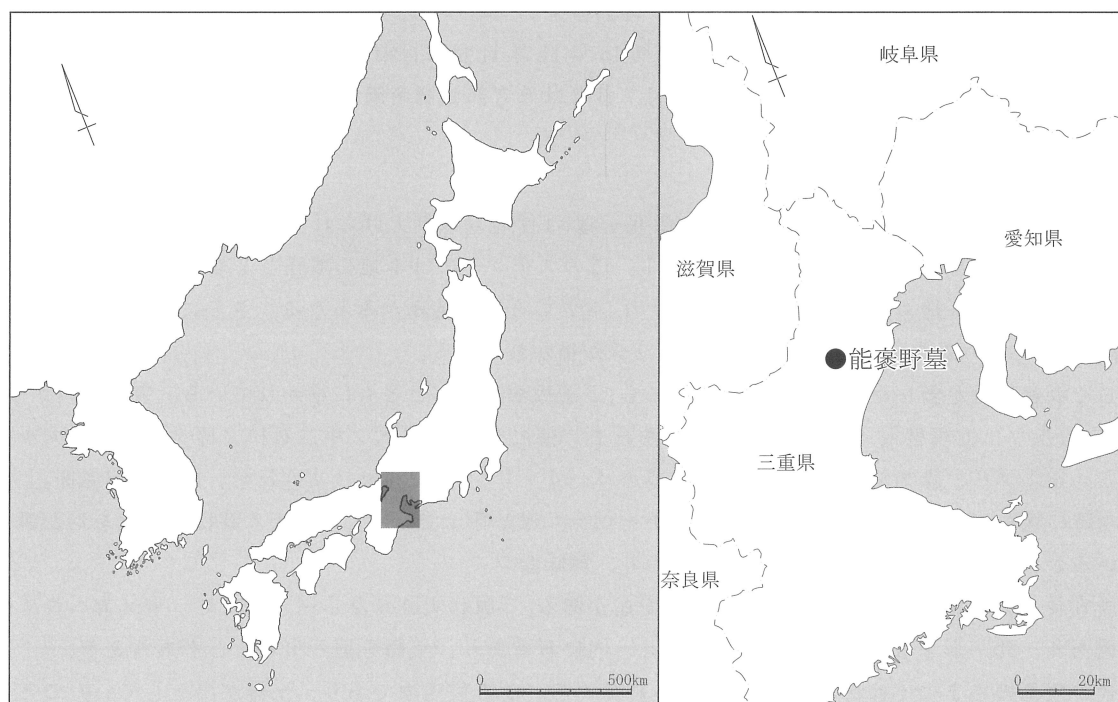
(1) 能褒野墓の来歴

① 治定の経緯

『延喜式』には「能褒野墓 日本武尊。在伊勢国鈴鹿郡。兆域東西二町。南北二町。守戸三烟。」とあり、「能褒野」は日本武尊の終焉の地とされている。江戸時代、能褒野は境界をもつ範囲ではなく、地形からきた漠然とした範囲であったことから、複数の日本武尊墓が候補として挙げられた。

小林秀樹氏の編集による『近世「のほの」考～江戸時代の人々が見たヤマトタケル墓～』では、近世に日本武尊墓の候補となった墳墓と、その典拠がまとめられている⁽¹⁾。近世に候補とされたのは、鈴鹿郡高宮村白鳥塚（現鈴鹿市加佐登町）、鈴鹿郡長沢村武備塚（現鈴鹿市長沢町）、鈴鹿郡長沢村双子（二子）塚（現鈴鹿市長沢町）の3つである。江戸時代幕府の公的な見解は白鳥塚説であったようである（『諸陵周垣成就記』）。だが、享保年間（1716～1735）には武備塚説が西田栄欣を中心として展開され、その影響を受けた亀山城主板倉氏が武備塚を整備した（『武備神社御再興覚書』）。さらに明治期に入ると、双子（二子）塚説が度会県学校教授の八羽石男を中心に展開され、その影響を受けた亀山藩知事石川成之が双子塚の整備をした（『白鳥陵之事』）。

明治期の日本武尊墓比定をめぐる動向については、吉村利男氏の論考に詳しい⁽²⁾。明治4年（1871）2月14日付けで「太政官布告」が出されると、伊勢国神戸藩は白鳥塚を⁽³⁾、亀山藩は双子塚を日本武尊御墓として報告した⁽⁴⁾。この時点では2ヶ所が日本武尊命墓として同様に扱われていたようであるが、同9年1月22日付け「教部省達」には、これより先日本武尊墓を伊勢国鈴鹿郡高宮村丸山（白鳥塚）に定め、この日、教部省が墓掌丁を置いたとある⁽⁵⁾。この経緯についてはこれまであまり知られていなかったが、宮内公文書館が所蔵する公文書を調査としたところ、『能褒野墓實檢勘註』にある「伊勢国鈴鹿郡高宮郷高宮村 能褒野墓實檢勘註」（明治6年12月付 大録 山之内時習、権大録 猿渡容盛、権中録 子安信成、小録 中島乗霽）が根拠であることがわかった⁽⁶⁾。山之内時習らは白鳥塚と二子塚を巡視し、周辺地理と墳丘の現況を調べた



第1図 能褒野墓 概略位置図 (1/25,000,000、1/2,000,000)

うえで、白鳥塚説を採用した。

しかし、明治12年10月31日付で宮内卿徳大寺実則から三重県に送られた指令によると、高宮村の白鳥塚から田村ノ内名越字丁子塚（現在地）に能褒野墓を改定したとある⁽⁷⁾。改定にいたるまでにはどのような経緯があったのか。同9年9月13日付の「教部権大丞来牒」には、「・・・丁子塚ト称シ候古墳ヲ右御墓御実績ト見込建議致シ候者有之就テハ地方ニ於テモ右等之伝説有之候哉又其徴証ニ備フヘキ書類等モ有之候哉精細御取調至急御報知有之度此段及御依頼候也。」とあり、教部省から三重県に丁子塚の情報提供を求めたようである⁽⁸⁾。

それから改定に至る経緯もあまり知られていなかったが、上記の『能褒野墓實檢勘註』にはその経緯が記されていた⁽⁹⁾。明治10年3月17日付で三重県令岩村定高から内務省社寺局長少書記官足立正聲宛に、伝説書と絵図面が提出された。そして、それをもとにして同10年12月付で六等属大澤清臣が「伊勢國鈴鹿郡田村之内名越村 日本武尊能褒野墓勘註」を著した。大澤は丁子塚が能褒野墓であるとする。これについてはやや詳しく述べておきたい。

大澤は根拠として以下の点を挙げた。①前方後円墳であり、当時の「土壺」が露出している。②陪冢が域外に散在する。③字を女カ坂というが、これは『古事記』の「於是坐倭后等及御子等諸下剉而」という故事に通じる。塚の南方の敷地が田地であることは、『古事記』にある「作御陵即匍匐廻其地之那豆岐田」という地勢に適う。④塚の南方を流れる御贄川は、『寛平熱田縁起』にある「渡鈴鹿河中瀬忽随逝水」という地勢に適う。⑤名越村は昔の長瀬郷であり、『寛平熱田縁起』にある「號其瀬日能知瀬今改為長瀬訛也」に通じる。

そして、この大澤の見解が根拠となって、明治12年に丁子塚へ改定がなされたのである。

②能褒野墓の兆域と修補

吉村利男氏の論考に詳しい⁽¹⁰⁾。これに関しては、『日本武尊御墓修繕書類 庶務課』に記載されている⁽¹¹⁾。明治13年（1880）、宮内卿から三重県令あてに御墓の兆域を決定するため、現地調査を指示したとある（「明治13年2月4日「日本武尊御墓兆域之義ニ付」）。しかし実際には歴然とした周溝や外堤はなかったようである。三重県と数回のやり取りをした後、宮内省は御墓の東北部には周溝を思わせる低地があることから、それを根拠にして西南部の外堤は見計らいで断崖いっばいに設けることとしたという。これに周囲の陪冢を含めて、兆域を確定したようである。そして、修補事業が進められた。

明治14年7月4日には民有地を買い上げ、同15年11月11日には前方部東南隅が降雨のために破壊されたため、周囲土堤が修補された。同18年12月7日には前方部側面南隅角付近が暴風雨で破壊されたため、周囲土堤が修補された。

③近世における丁子塚（能褒野墓）

坂倉茂樹『能褒野陵考』では白鳥塚、武備塚、双子塚、丁子塚が取り上げられている。中でも寛政3年（1791年）3月付で丁子塚のスケッチが描かれている。このスケッチには本地の墳丘とともに、「寛政元年三月鈴鹿郡名越村近辺ニケ様ノ塚アリ尤能褒野近辺ナリ。」という書き込みがみられる。さらに、「塚ヨリケ様ノ焼物掘出ス。」という書き込みとともに壺のスケッチが描かれている。

同じく坂倉茂樹が著した『能褒野古墳図』にも、丁子塚が川などとともに描かれている。書き込みが多く、「墓上ニ松生フ、近頃里人ノ植シト也。」、「小キ石モテ積上タリ。」、「穴ノ中ニ石棺ノ碎タルアリ、大ナル壺枚里人ノ家ニアリ、碎タル石厚キハ四五寸、薄キハ一寸アリ。」、「穴深サ式丈八尺余、廻リ廿四五間。」とある。当時の様子がよくわかる。地元の人が「チャウシ」塚と呼んでいたこと、そう呼ばれる故を形が銚子に似ているからであろうという考察も書かれており、興味深い。

本居宣長『古事記伝』にも丁子塚に関する記述がある。「周廿丈許りなる円き山にて、東ノ方へ長く引きたる尾あり、此ノ形をもて丁子とは云なるべし、内に石構あり、土物を掘り出ることもありとぞ、・・・是レも上代の陵墓のさまにてはあるなり。」と記されている。前方後円墳であり、土器が出土していたことがわかる。日本武尊との関連には触れられていない。

安岡親毅『勢陽五鈴遺響』には、「天正十二年七月河崎村峰城合戦ニ討死ノ将ヲ葬セシ地ナリト云ヘリ又小丘五々処モアリト云ハ皆此戦亡ノ士卒ヲ葬ス処ノ墳ナリ」として、丁子塚は天正12年（1584）の武士の墓と位置づけられている。

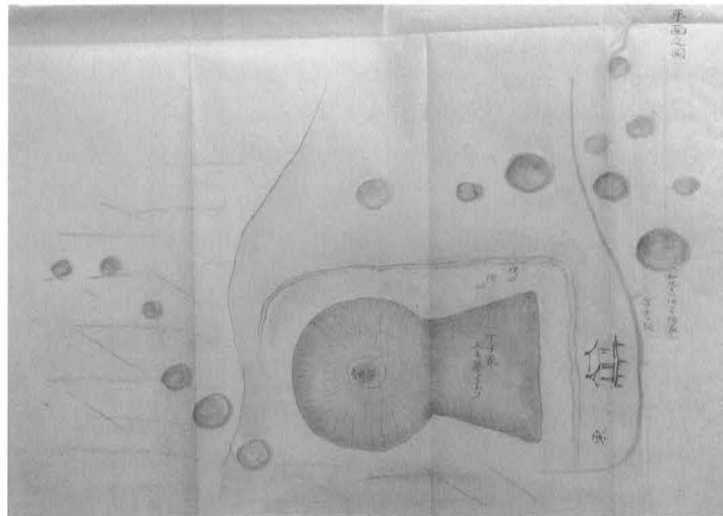
明治時代には、丁子塚の治定にあたって多くの絵図が描かれている。宮内公文書館が所蔵する絵図としては『能褒野墓實檢勘註』⁽¹²⁾（第2、3図）、『日本武尊御墓図』⁽¹³⁾（第4図）があり、前者には治定前、後者には治定後の丁子塚が描かれている。三重県総合博物館が所蔵する絵図としては「王塚立形之図式」⁽¹⁴⁾、「田村之内名越里字女ヶ阪」⁽¹⁵⁾、「立形見取絵図」⁽¹⁶⁾、「田村之内名越里字女ヶ阪旧字王塚」⁽¹⁷⁾、「日本武尊御陵」⁽¹⁸⁾があり、後一者には治定後、その他には治定前の絵図が描かれている。当時の飛地・陪冢の様子がよくわかり興味深い。

（土屋隆史）

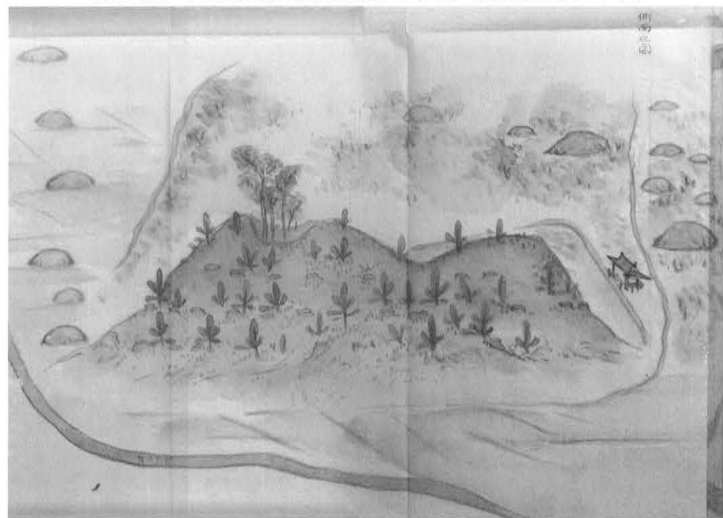
（2）周辺の地理的環境

本墓の所在する亀山市は、三重県の中央部からやや北よりの旧東海道沿いに位置している。その市域の中心地はもっとも近い伊勢湾の海岸線から直線距離で10kmほど内陸に入った丘陵地帯に広がる。背後に北から南に延びる鈴鹿山脈が控えており、山頂の標高が1000m前後の山々が連なっている。その山間部から流れ出る大河川として鈴鹿川があり、西から北東に流れて伊勢湾に注いでいる。鈴鹿川にはいくつかの支流が流れ込むが、そのひとつに安楽川がある。また安楽川には北から御幣川が合流している。この合流地点は鈴鹿市との境界に近い亀山市の東端付近にあたり、東側は鈴鹿市域から広がってくる傾斜の緩やかな扇状台地の末端部となっている。その縁辺は段丘となっているが、その段丘に近い台地上の平坦地に本墓は築かれている。

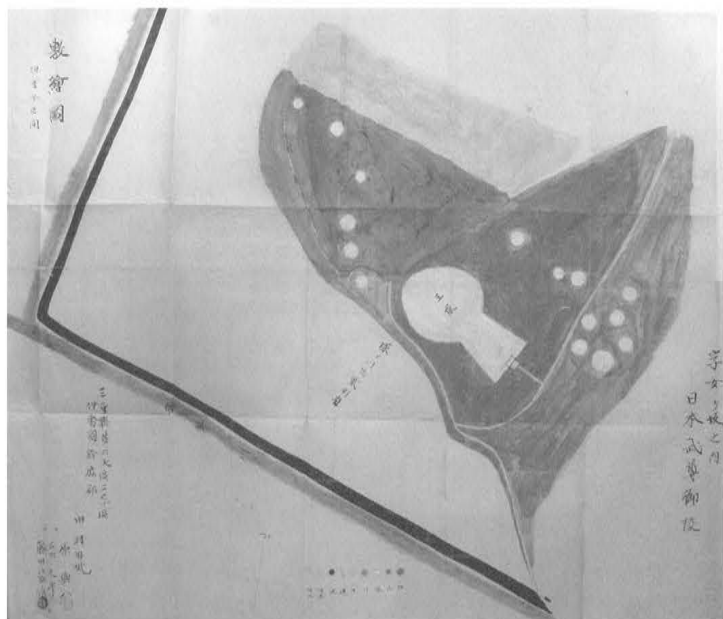
（清喜裕二）



第2図 「能褒野墓實檢勘註」にみる能褒野墓（1）



第3図 「能褒野墓實檢勘註」にみる能褒野墓（2）



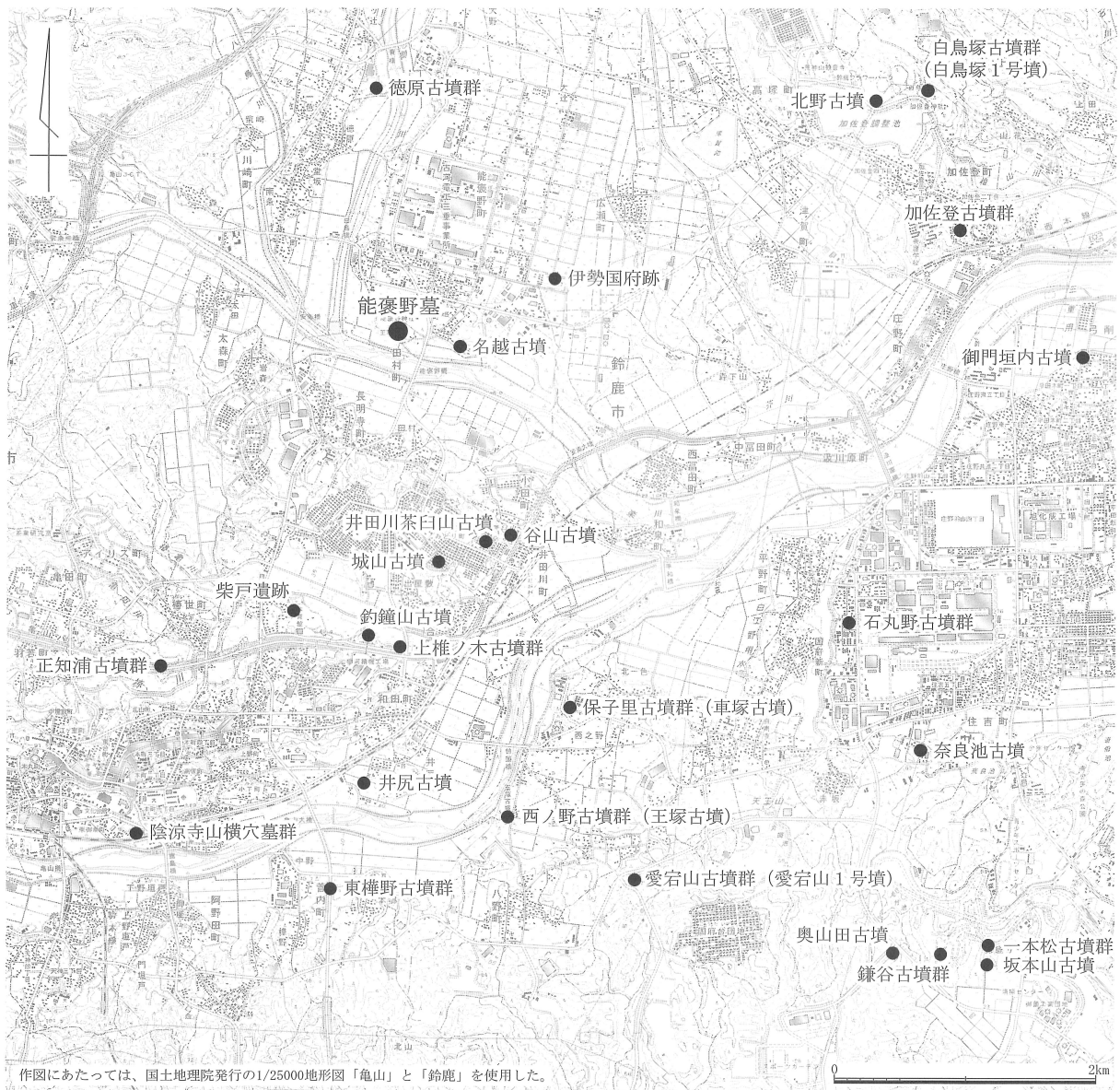
第4図 「日本武尊御墓図 / 明治写」にみる能褒野墓

(3) 周辺の歴史的環境

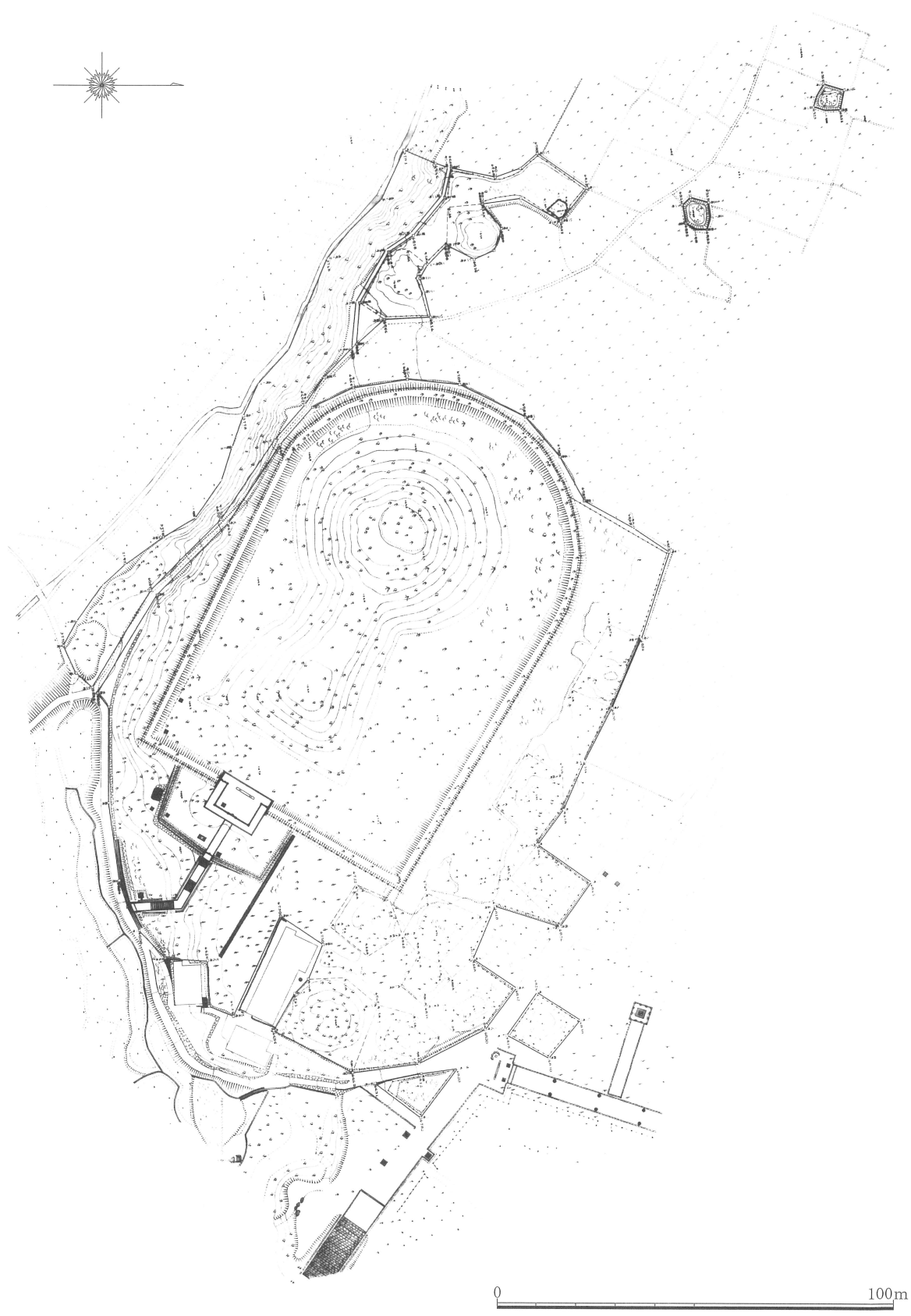
能褒野墓周辺では、能褒野墓築造以前の状況が良くわからないものの、今回の調査で出土した縄文時代晩期の墓に使われたとみられる深鉢や遺物包含層中より出土した弥生土器の存在から、少なくとも縄文時代晩期頃には土地の利用があったことがわかる。

また、能褒野墓の本墓周辺には、当庁の境界内外に多くの小古墳が造られている。それらのほとんどは古墳時代後期以降の円墳もしくは方墳と考えられるが、古墳時代中期以前の古墳については、能褒野墓東方にある古墳時代前期の名越古墳が知られるのみである。名越古墳は現状ではよくわからないものの、前方後円墳の可能性が指摘されている⁽¹⁹⁾。名越古墳と本墓の埴輪は、鱈付円筒埴輪があることや突帯設定用に四角形の凹みをつけることなど共通点が多い。鱈付円筒埴輪は、畿内で墳丘が200mを超える大型前方後円墳にも使用されており、能褒野墓周辺と畿内中枢部との関係が窺える資料の一つである。

能褒野墓より安楽川を挟んで南の丘陵上には、豊富な副葬品を出土した井田川茶白山古墳⁽²⁰⁾が築かれた。これは古墳時代後期初め頃の古墳で、この地域の横穴式石室を埋葬施設にする古墳の中では最も古いものである。能褒野墓の域内陪冢り号では、今回の調査で横穴式石室から古墳時代後期中頃より終わり頃にかけての須恵器が出土しており、能褒野墓周辺においては横穴式石室が古墳時代後期全般にわたって利用されている。



第5図 能褒野墓 周辺遺跡分布図 (1/50,000)



第6图 能褒野墓 陵墓地形图 (1/1,500)

たことがわかる。ただし、域内陪冢と号や飛地に号のような低墳丘の古墳については、横穴式石室以外の埋葬施設や直葬の可能性も考えられる。

奈良時代には、能褒野墓の約1 km東方に国府が築かれるが、このことを先述した鱈付円筒埴輪の使用や古い横穴式石室をもつ井田川茶臼山古墳より豊富な副葬品が出土したこととあわせて考えると、古墳時代より古代にかけて、この周辺が重要な地域であったことがわかる。(横田真吾)

1 調査に至る経緯と調査の経過および方法

(1) 調査に至る経緯と調査の経過

調査に至る経緯 先にも触れたように、能褒野墓の周囲は、南側が安楽川に面した段丘面で切れ落ちていく。東から北側に反時計回りに回り込む範囲は、能褒野神社の所有地として今後も大きな環境の変化はないと考えられる。一方で、西側から北側に時計回りに回り込む範囲は、近年まで茶畑がひろがることで周辺の生活圏とは一線を画しており、いわば緩衝地帯のような存在であった。

ところが、その茶畑も売却されて新たに宅地として利用されることになり、一気に周辺の生活圏が本墓の境界線と接する事態となった。そのため、適切な陵墓管理をおこなうための境界明示を含めた対応が求められるに至った。その一環として境界線沿いに新たに外構柵を設置する計画が策定されたことにより、工法の検討に資するデータを得る目的で、事前に施行予定区域の埋蔵文化財調査をおこなうこととなった。

調査の経過 調査は、平成25年10月7日に現地作業を開始した。掘り下げは第1トレンチからおこない、順次トレンチ番号に沿っておこなった。全体的な掘り下げが進み各トレンチ内の状況を把握した後に遺構が確認されるなど、更なる精査が必要なトレンチの調査を進めつつ各トレンチの状況に応じて完掘に至った。

また、調査と並行して測量業者への委託事業として世界測地系に基づく現況測量図の作成を併せておこなった。その中には完掘したトレンチのレーザー計測と写真測量による平面図の作成を含んでいる(第7・8図)。現地での測量作業は事前調査期間中に随時おこなった。基本的には本墓にかかる本地・飛地すべてについて測量をおこなったが、飛地い号の一部である崖面については等高線を省略した範囲がある。

平成25年12月6日にトレンチの埋め戻しや仮設物の撤去など、すべての現地作業を完了して、調査は終了した。開始から終了までの期間は55日間である。調査期間中、11月23日には陵墓管理委員会の現地視察をいただき、ご指導を賜った。また、11月24日には、マスコミ各社、16学協会への現地公開をおこなった。

なお、この間、調査の途中という制約の中で、土層や遺構についてその時点での可能性を含めた所見について述べる機会があったが、すべて本報告の所見が優先されることを明記しておきたい。

最後に、調査にあたっては、亀山市教育委員会、亀山市建設部都市計画室、三重県教育委員会には準備段階から種々ご配慮いただいたほか、調査中には有益なご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。

(清喜)

(2) トレンチの設定

事前調査のトレンチは、第1トレンチから第31トレンチまで、墓域沿いに計31箇所設定した(第8図)。陵墓地形図上でおこなった当初のトレンチ設定予定では、ある程度間隔を一定にしてトレンチを配置していったが、域内陪冢や飛地が墓域に隣接する場合には、遺構の残存状況を確認するため、その部分にもトレンチを設定した。

各トレンチの幅は基本的に2 mであるが、調査地の状況によって拡張したもの、2 mより短いものもある。トレンチの長さについては調査の必要に応じて異なるものに設定した。具体的なトレンチの規模や形状については、各トレンチの報告に記す。

(3) 基本的な層序

第1トレンチから第31トレンチにおける基本層序は、表土(I)、後世盛土(II)、流土(III)、墳丘盛土(IV)、地山(V)の順である。ただし、調査範囲が広範であるため、各層の詳細については各トレンチの記述を参照されたい。

X=-123500

Y=43900

Y=44000

Y=44100

Y=44200

X=-123500

X=-123600

X=-123600

X=-123700

X=-123700

Y=43900

Y=44000

Y=44100

Y=44200



グレーの部分は陵墓地形図の測量範囲

第7図 能褒野墓 全体図 (1/1,000)

X=-123500

Y=43900

Y=44000

Y=44100

Y=44200

X=-123500

X=-123600

X=-123600

X=-123700

X=-123700

Y=43900

Y=44000

Y=44100

Y=44200



第8図 能褒野墓 トレンチ配置図 (1/1,000)

Ⅰ層 表土。現地表面の土である。色調は暗褐色から黒褐色で細粒砂から成る。

Ⅱ層 後世盛土。近代に能褒野墓周辺を整備した際の盛土や盗掘後の横穴式石室を埋めた土である。色調は黄褐色から黒褐色で、細粒砂と粗砂から成る。

Ⅲ層 流土。域内陪冢や飛地の墳丘より流出した土や、表土下の自然に堆積した土である。色調は黄褐色から黒褐色で、細粒砂から成る。

Ⅳ層 墳丘盛土。域内陪冢と飛地等を築造する際に盛られた土である。色調は黒褐色（Ⅳ a）、黄褐色（Ⅳ b）、その他（Ⅳ c）で、細粒砂から成る。

Ⅴ層 地山。遺構の基盤となる層で、域内陪冢と飛地も基本的にこの層上に全て盛土することによって造られている。色調は黄褐色から暗褐色で、細粒砂、中粒砂、粗砂から成る。（横田）

2 調査成果

（1）調査範囲の現況

31箇所のトレンチを設定した調査範囲は、本地の中でも能褒野墓そのものに関わる部分ではない。調査範囲の特徴は西から以下のような状況にある。①能褒野墓を囲む外堤に沿った範囲（第1～3トレンチ）から、②空閑地（第4～6トレンチ）を挟んで、③域内陪冢い～り号が点在する範囲（第7～21トレンチ）と飛地に号（第25～28トレンチ）・飛地ほ号（第29～31トレンチ）となる。さら南に回り込み、④能褒野墓拝所北東の空閑地（第22～24トレンチ）に至る。

この中でも、特に第8トレンチから第31トレンチまでの範囲は、多くの域内陪冢や飛地を含んでいる。各陪冢・飛地は一定の高さをもち、陪冢に号のような低墳丘も存在するものの、墳丘が群集している様子を視覚的にもよく捉えることができる。また、おおむね陵墓地全体が樹林地となっており、能褒野神社境内地と一体化したような景観を形成している。一方、第1トレンチ～第7トレンチの範囲については、域内陪冢り号が位置するものの、樹木なども少ない空閑地が直接新たな宅地開発範囲と接する状況にある。

また、能褒野墓そのものは現地表面で周辺地より約1.5m低くなっており、安楽川に向けて徐々に下る地形にあることが観察されるが、そのような本来の地形とは別に、第4～13トレンチに至る範囲には、域内陪冢を避けつつも広く旧地形を削った痕跡が確認される。これは、昭和4年測量（昭和5年製図）の陵墓地地形図でも確認できる。調査範囲の現況についての大きな特徴といえる。

さらに、能褒野墓そのものについても測量をおこない現地踏査をおこなったので、その結果を記しておきたい。今回の測量図から墳丘各所の規模は以下の通りである（第9図）。全長：約90m、前方部長（くびれ部～前方部前面）：約40m、後円部径約54m、前方部前面幅：約40m、後円部高：約8.5m、前方部高：約5.5m。

陵墓地地形図では、等高線間隔が1mと広いこともあって、これまでは図上で段築や平坦面を認識することが難しかった。また、実際に現地に立っても、一見しただけでは明瞭な平坦面は後円部頂を除いて不明瞭であることも事実である。しかし、仔細に観察した結果、いずれも後円部において平坦面を複数箇所を確認した。平坦面を確認した範囲は、第9図に破線で表現している。まず、標高46～47m間において、断続的に4箇所の平坦面を確認した。また、標高49m付近に1箇所の平坦面が確認できる。2箇所の比高から、前者が第1段テラス面で、後者が第2段テラス面に該当すると考えられる。ただし、第2段テラス面と推測される平坦面は、同じ高さで同様の平坦面が観察されないため、その評価を定めるには至らない。現状からは墳丘が2段もしくは3段築成であることを指摘しておきたい。

なお、前方部において平坦面は観察されていない。（清喜）

（2）各トレンチの所見

第1トレンチ（第10図、図版31）界標13号～14号間に位置しており、能褒野墓墳丘のほぼ主軸上にあたる。土堤をまたいで長さ10.2m、幅2mの規模で設定したが、土堤の強度を保持するため、一部を掘り残している。調査の結果、能褒野墓の周囲に築かれている土堤の構築状況が確認された。

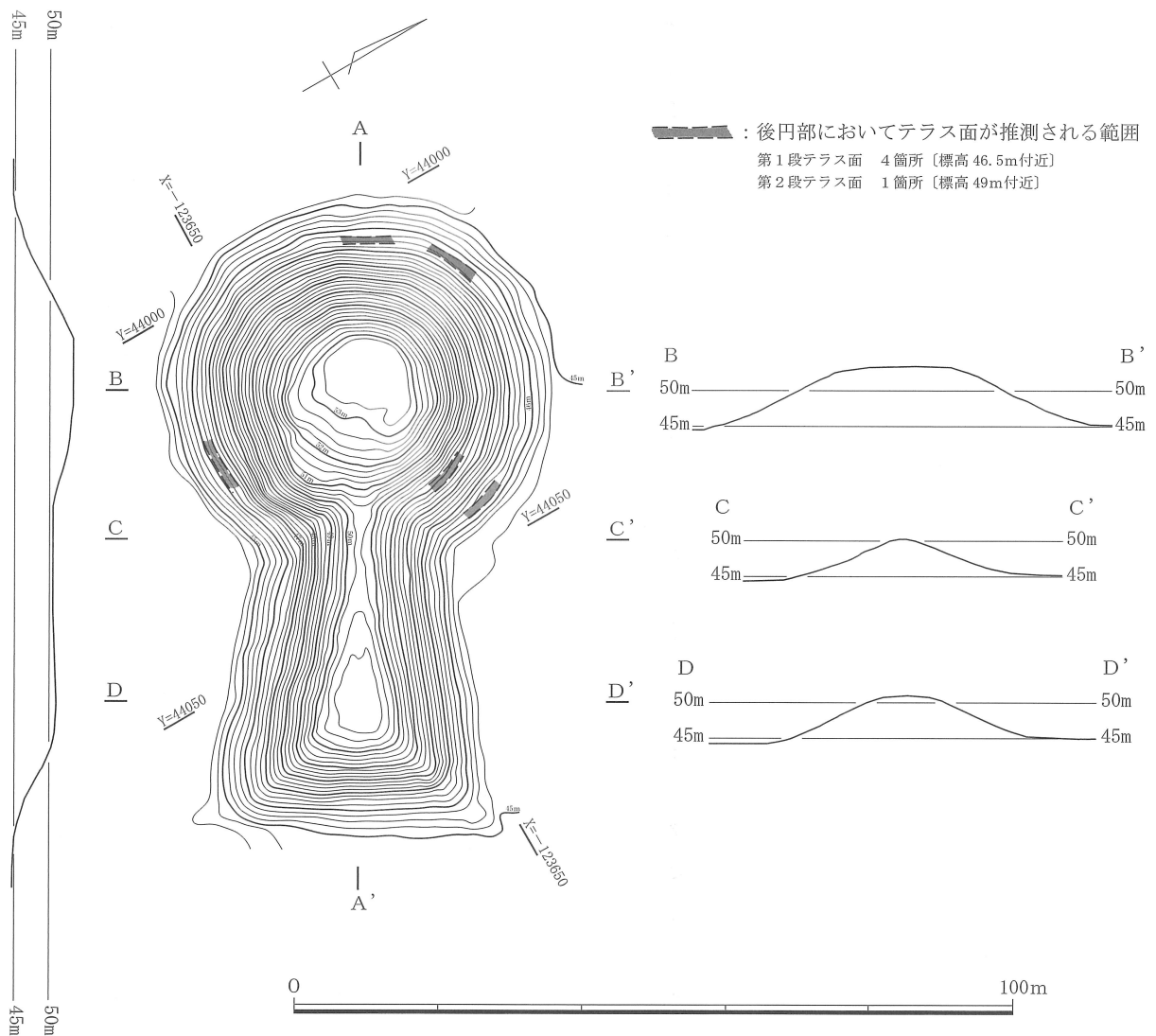
土層は、土堤の頂部付近がもっとも厚く、約1.2mを測る。表土（Ⅰ）の下に現土堤の盛土として5層分

が確認できる（Ⅱ a、Ⅱ b）。盛土の最上層は黒褐色土であるが、それ以外は灰褐色土を中心としており、一部に茶褐色土、黄褐色土がみられる。これらの盛土の下に地山（Ⅴ）が検出されるが、トレンチ東端から約 1.2 m の位置から約 3.4 m の幅で、地山削り出しによる土堤状の高まりが認められる。上記の盛土は主としてこの高まりの上にもみられるが、下位の 4 層分（Ⅱ b）は地山の高まりよりも内側に形成されており、最上層（Ⅱ a）のみが外側に延びて現土堤が完成している。

また、現土堤上には石柵が設置されているが、地山上面を約 0.2 ～ 0.3 m の深さで掘り込み、その掘方内に石柵を建てて、基部付近をモルタルによる根巻きとしている。そして、掘方床面から 0.6 m ほどの厚さの盛土で固定している。石柵の設置は、最上層の盛土と同じ工程内でおこなわれていたことが判明した。

遺構は、現土堤の下に確認された地山の高まりがある。明治 13 年（1880）の兆域決定のための現地調査の際に、既に土堤状の高まりがあったとされるが、土層断面からは、トレンチ内における地山面の最大比高が 0.8 m ほどの高まりで確認できる。地山面にはいくつか掘り込みの痕跡も見られるため、旧状をとどめているとはいえませんが、地山が土堤状に造成されていたことは確かなようである。明治 13 年に認識されていた土堤状の高まりの有力な候補と考えられようか。地山面の最高点は標高約 45.5 m である。

また、地山に見られるこの状況が、能褒野墓の築造時に遡るかどうかという点が問題となろう。観察の結



第 9 図 能褒野墓 墳丘平面図・断面図 (1/1000)

果では、上面に幾つか掘削箇所が認められ旧表土も確認できないことなどから、現在の土堤盛土の前に旧地表面は少なからず改変されていたと判断される。よって、少なくとも現状が直接的に築造時の状況を示しているとはいえない。しかし、南壁断面図左端付近（能褒野墓の墳裾にもっとも近い位置）の標高 44.8 m で平坦な地山面が確認されており、この範囲がトレンチ内でもっとも本来の状況を示している可能性がある。また、その標高より土堤状に高まる地山は約 0.8 m 高いことから、もともと一定の高低差をもっていた可能性を考えることができる。能褒野墓築造時の遺構として土堤が形成されていたかどうかは不明だが、本墓の周囲は、周溝状に周辺地形より低く削りこまれていた可能性は考えられるかもしれない⁽²¹⁾。

この土堤が、明治 13 年に認識されていた土堤に該当すると考えられる。

遺物は出土していない。

なお、本トレンチが、能褒野墓にもっとも近い位置まで設定されたものであるが、直接関わるような出土遺物は認められなかった。

第 2 トレンチ（第 10 図、図版 32 - 1 ~ 4）土堤の外側法面に設定した。界標 14 号の北東方向約 3 m 付近に位置する。規模は、長さ 1.7 m × 幅 2 m である。調査の結果、第 1 トレンチと同様に土堤の構築と石柵の設置の関係性を含めた構造が確認された。

土層は、表土（Ⅰ）の下に、まず現土堤外法を掘り込んだ素掘溝が確認できる。同じ位置に 2 回掘り込まれている状況が観察され、これにより現土堤の盛土（Ⅱ）と地山面（Ⅴ）も削られている。断面を見る限り、一見地山が土堤状に成形されているように見えるが、これは素掘溝による見かけの形状と考えるべきであろう。そのため、本トレンチにおける地山成形による土堤状の高まりについては不明瞭といえる。

遺物は出土していない。

第 3 トレンチ（第 10 図、図版 32 - 5 ~ 7）第 1・2 トレンチと同様に、現土堤外側の平坦面に設定した。界標 16 号の西側に位置しており、規模は長さ 2 m × 幅 1 m である。調査の結果、厚さ 1.6 m に及ぶ土堤外法側の盛土と考えられる堆積が確認された。

土層は、表土（Ⅰ）の下に、現土堤の外側に掘られた近年の素掘溝の埋土が認められる。その下に厚さ 0.6 m を測る黒褐色土（Ⅱ a）と厚さ 0.1 ~ 0.3 m を測る暗灰褐色土（Ⅱ b）が認められる。この土層に現土堤の斜面につながるような顕著な立ち上がりは認められないが、第 1・2 トレンチの土層の状況と比較する限り、現土堤の下層部分にあたる盛土と考えられよう。また、2 つの土層の間には、下層の窪地部分に薄く暗茶褐色の細砂が堆積している。そして、下位のⅡ b 層の下に、石を大量に含む地山面が確認された。標高 44.8 ~ 44.9 m でほぼ平坦に整えられている。

遺構は現土堤の盛土以外には確認されなかった。

遺物は出土していない。

第 4 トレンチ（第 11 図、図版 33、34）界標 16 号 ~ 17 号間のほぼ中間付近に位置しており、当初長さ 10 m × 幅 2 m の規模で設定したが、南壁に沿って石列が検出されたため、詳細を確認するために長さ 6.5 m × 幅 2 m の範囲で南側に拡張をおこなった。これにより、最終的な規模は長さ 11.5 m で最大幅は 4 m となった。調査の結果、地形改変の痕跡と石列を伴う石敷遺構を検出した。

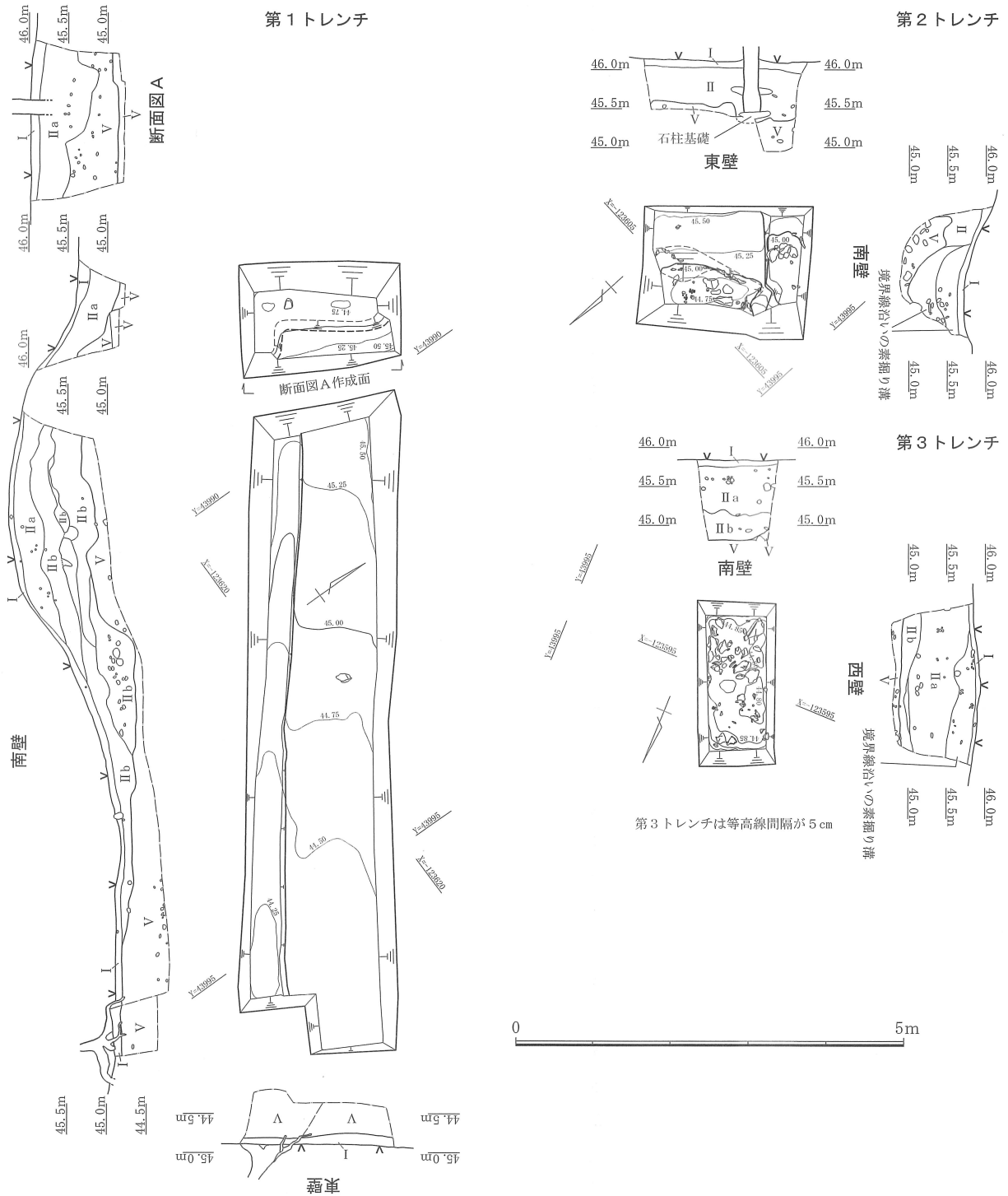
土層は、表土（Ⅰ）の下に広く盛土（Ⅱ）が認められる。これは、南壁の堆積状況から後述する石敷遺構を少なからず損壊する行為がおこなわれた後に堆積したものである。南壁では 1 層、北壁では 2 層分を確認した。この盛土の下は地山面となるが、特に北壁を観察すると、上面に旧表土は認められず大小の掘り込みの痕跡が残るため、旧地形をそのまま覆った盛土ではなく、比較的大きな改変がおこなわれた後にあまり時間を置かずに盛土されたと考えられる。特に北壁の中央部付近はトレンチ内でもっとも深く掘り込まれており、床面は地表面から約 1 m 下の標高約 44.4 m である。この掘り込みは平面的にも確認でき、拡張区を除くトレンチの東半分を占める。

次に南壁の土層をみておきたい。南壁は、石敷き遺構の構築に関係する土層が確認されている。拡張区があるため、土層断面は図上では 1 面で表現しているが一連ではない。断面図に A ~ E のアルファベットをふっ

ているが、A-B間が拡張区南壁の土層断面であり、D-B-C間が当初設定の南壁土層断面となる。

〔A-B間〕 表土（Ⅰ）の下に盛土（Ⅱ）がみられる。石敷遺構は、いくらか損壊した後にこの盛土に覆われて埋没したと考えられる。盛土の下には地山までの間2層（①・②）が確認された。これが、石敷遺構の整地層と考えられる。上面に原位置をとどめる石敷が認められるため、上層の上面がおおむね本来の遺構面にあたると考えられる。ただし、大半は石が攪拌されたり北側に引きずられたような状態を示しているため、多くの範囲は少なからず損壊していると考えられる。地山の検出面は標高約44.8mである

〔D-B-C間〕 表土（Ⅰ）の下に盛土（Ⅱ）が厚い点に特徴があり、もっとも厚い箇所では約0.8mを測る。



第10図 能褒野墓 第1～3トレンチ平面図・断面図 (1/80)

トレンチ南壁西端から約3mの範囲は地山面を直接覆っているが、この東側で盛土は厚みを減じて立ち上がる状況を示している。このことから、先述の石敷遺構を損壊した改変が、下層を削り込んで地山まで達したと考えられよう。この盛土と地山面までの間には、石敷遺構構築のための整地層が認められる。この整地層については、整地から構築の過程を説明する中で詳述したい。

遺構は、石列を伴う石敷遺構を検出した。構築の手順に沿って記述を進めたい。

まず、地山(V)を削っておおむね平坦に整える意図があったようである(改変1回目)。しかし、実際はトレンチ中央付近がもっとも低く、地山の検出面が標高44.7～44.8mであるのに対して、東側と西側はやや高まっており、地山の検出面は標高約45mである。結果的に石敷遺構の構築範囲は、地山整形時点では若干の窪地となっていたようである。地山直上の土層(⑥)を観察すると、暗黄褐色粗砂と黒色細砂のごく薄い層が幾重にも堆積する状況が確認できた。多少の時間経過を経る中で、降雨の影響などで周辺からの流入土がトレンチ中央付近にみられた窪地にたまったことで形成された自然堆積層であろう。その上に石敷遺構構築前の整地層が形成されている(③～⑤)。この整地層は、II層が盛土される前の改変のために断面D-E間で確認できるに過ぎないが、厚さ0.1～0.2mほどの土層を少なくとも2段階に分けて積んでいる。

そして、石列を伴う石敷遺構が整地層上面に構築されている。しかし、損壊の影響もあってか石敷の区画は明瞭ではない。検出範囲としておおむね東西5m南北2m程度を把握できるだけであるが、一定の範囲内に石材が認められることから石敷であったと推測する。石列は、西側がやや北に振れている。長さ約3.8mが検出された。西側は損壊しているようである。また東側はトレンチ外に延びているため、本来の長さは明らかではない。使用されている石材は長径0.15～0.2mほどの大きさが中心で、設置の過程で隙間をさらに小型の石材で埋めている。また、石列には面があり石材の平坦面を意識的に南側に向けて設置している。

石列以外では、南壁Bから東1m付近に直径0.2mほどの石材が面的に集中する箇所がみられる。そのほか、石列に沿って直径0.1mほどの石材が幅0.5m程度で集中している。検出状況はこの石敷遺構を損壊した改変により、全体的に南から北に向かって石材が引きずられた結果と考えられ、本来の状態を示している可能性は低いと考えられる。復元的にみるならば、石列の南側に一定の範囲で石が敷き詰められているような状況だった可能性が考えられる。

しかし、これまでも幾度か述べてきたとおり、石敷遺構はその後改変を受け、その過程で少なからず損壊している(改変2回目)。ただし、この改変にあたって、石列の存在に気づいてからはそれ以上の破壊はおこなっていないようであり、発見した遺構に対して一定の配慮のあったことがうかがわれる。そのため、石列より北側に石敷が広がっていた可能性は低いと考えておきたい。石列は東側がトレンチ外に延びており、現在の能褒野墓を囲む土堤の下に潜っていくようにも見える。第1トレンチのように、地山が土堤状の高まりをもっていれば、石列は土堤の手前で終わるか北側に屈曲すると考えられるが、調査範囲外であり両者の関係については不明である。よって、石敷遺構が土堤の構築前のものか後のものかということを含めた、構築時期と存続期間及び遺構の性格については、確実に伴う状態での出土遺物がない点、検出範囲が全体の一部にとどまっているうえ、損壊の範囲が広い点などから不明と言わざるを得ない。

遺物は、表土から須恵器甕の胴部と考えられる破片が出土したのみである。

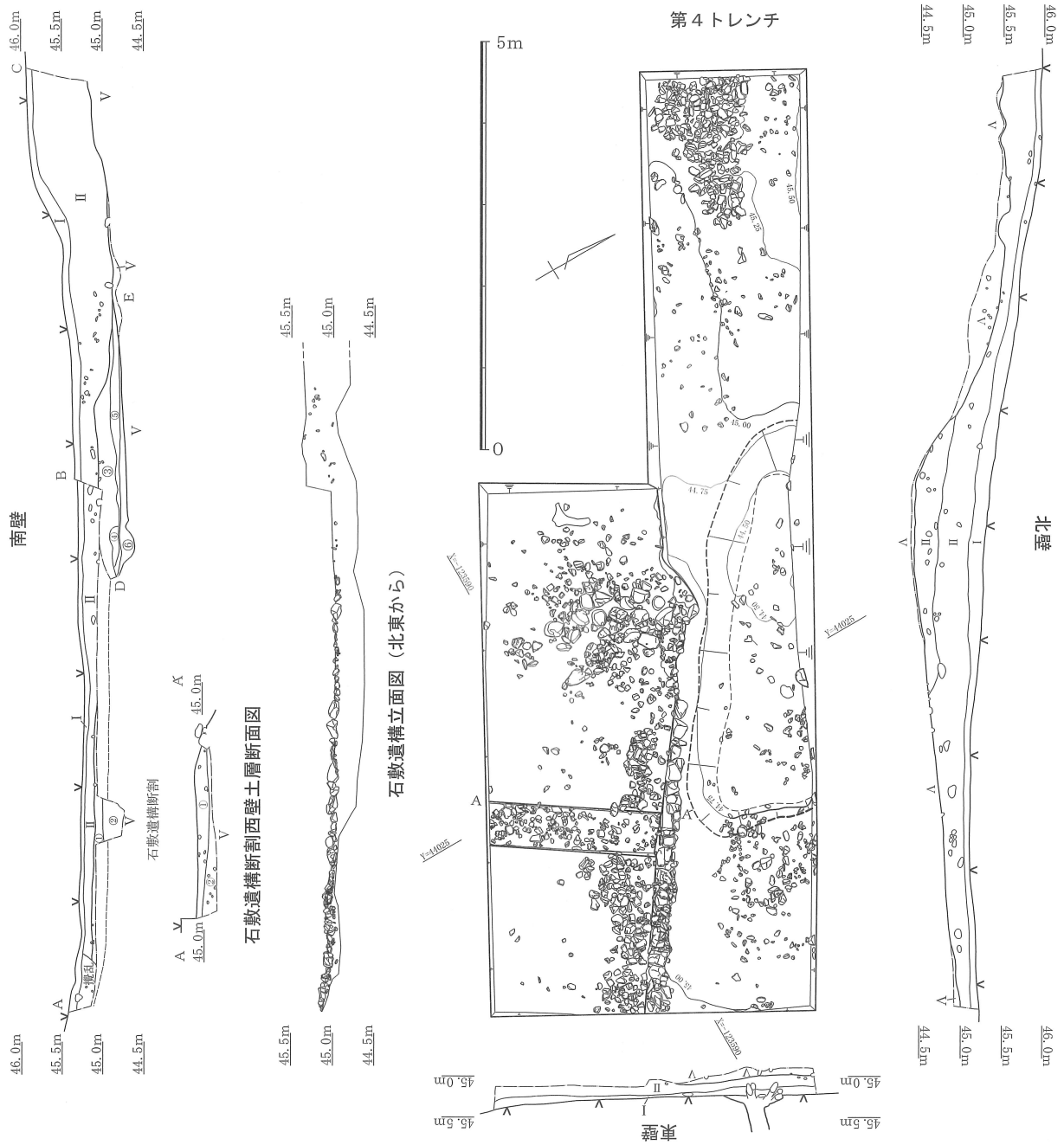
第5トレンチ(第12図、図版35-1～4) 界標17号付近に位置しており、能褒野墓本地の中で北端の角にあたる。長さ5m×幅2mの規模で設定した。調査の結果、地山まで削り込んだ旧地形の改変と、改変後の盛土を検出した。

土層は、トレンチ北端に検出範囲だけで幅2m×深さ1.4mの掘り込みがあった。これは、境界外にも広がる大きな攪乱である。地山まで深く掘り込んでいる。一方で、南側から約3mの範囲で地山まで削り込んだ地形改変とその後の盛土が確認された。ここでの土層については、現況に至る経過に沿って述べたい。まず、地山はおおむね北側から斜めに標高45.35mまで削り込まれているが、床面はおおむね標高45.2～45.3mの範囲で平坦に整えられている(改変1回目)。その直上には、部分的に黒色土や地山が起源と考えられる厚さ数cmの流土が不規則な互層(①)を形成している。これらは、地形改変の直後に降雨の影響などで周

辺から流入したものと考えられるが、部分的であり、その後表土が形成された状況も認められないので、時を経ず暗茶褐色土の盛土（Ⅱ b）がおこなわれたと考えられる。さらにその上に、黒色土（Ⅱ a）が0.3～0.5 mの厚さで認められる。断面図では、先述の大規模な攪乱坑によって地山の立ち上がりが途中で切られているために、Ⅱ b層と地山（Ⅴ）の関係が明らかではないが、対面する断面の観察では、地山（Ⅴ）の上面とⅡ b層上面が一連の平坦面となっている。その上にⅡ a層が盛土されていることから、盛土の前に、Ⅱ b層と地山（Ⅴ）が全体的に削平された可能性が高いことを示すと考えられる（改変2回目）。

よって、少なくとも2回の大きな改変を受けていると推定される。これは、第4トレンチでも確認された改変が2回にわたることと対応していると考えられる。時期も第4トレンチで推定されたものと同じと考えられる。

上記の旧地形の改変痕跡以外に遺構は確認されていない。



第11図 能褒野墓 第4トレンチ平面図・断面図 (1/80)

遺物は出土していない。

第6トレンチ（第12図、図版35-5~7） 界標17号~18号の間付近に位置している。長さ10m×幅1mの規模で設定した。調査の結果、地山まで削り込んだ地形の改変と改変後の盛土を検出した。現状の地形は北側が高くなっている。

土層は、トレンチ北端から約2~4m間の地山上に暗茶褐色土層が確認される。これが、本トレンチ内ではもっとも初期の土層となる。この土層に対しては、北端に溝か土坑が掘り込まれており、地山が削り込まれるまでの地表面であったことが推測できる。その後、北端から約4mの位置から約1.3mの高さで斜めに削り込まれている。この削り込みは標高45.1m付近に及び、南側に平坦な床面が形成されている。この高さは第5トレンチでの床面とほぼ同じ高さであり、北側から斜めに削り込んでいる状況も同様であることから、第5トレンチで認められた1回目の改変と一連のものと考えてよいだろう。この改変箇所は黒色土によって一気に盛土されている（Ⅱ）。

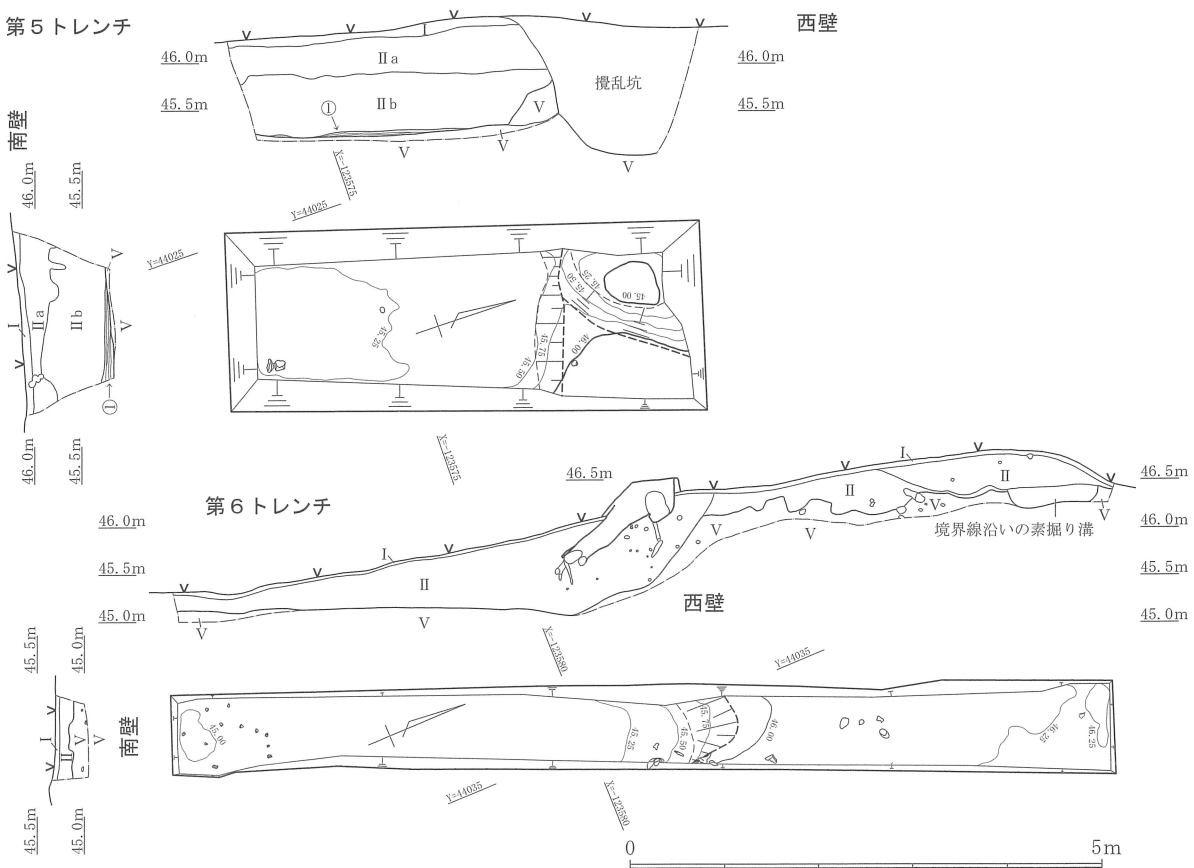
また、本トレンチにおいては、2回目の削り込みについて、その痕跡は確認されていない。

遺物は出土していない。

最後に、第4~6トレンチで確認された地形の改変について整理しておきたい。

この改変は、削り込みの状況や床面の高さなどから相互に関連するものであり、一連のものと考えられる。1回目の改変は、床面を標高45m前後でほぼ平坦に揃えており、第4トレンチの石敷遺構もこの一連の床面上に構築されていることから、何らかの計画性をもった造成として位置づけることができよう。また、一部の検出にとどまっているが、第1・3トレンチでも土堤の外側で平坦な地山の検出面がみられる。その標高は44.8~44.9mであり、第4~6トレンチでの検出面とほぼ同じであることを指摘できる。造成は現地形では読み取れない第1~3トレンチ付近にまで及んでいる可能性が高いと考えられよう。

この時、第1トレンチ南壁東端から1.4mまでの地山面が標高44.8mで平坦となっている点が注意される。



第12図 能褒野墓 第5、6トレンチ平面図・断面図 (1/80)

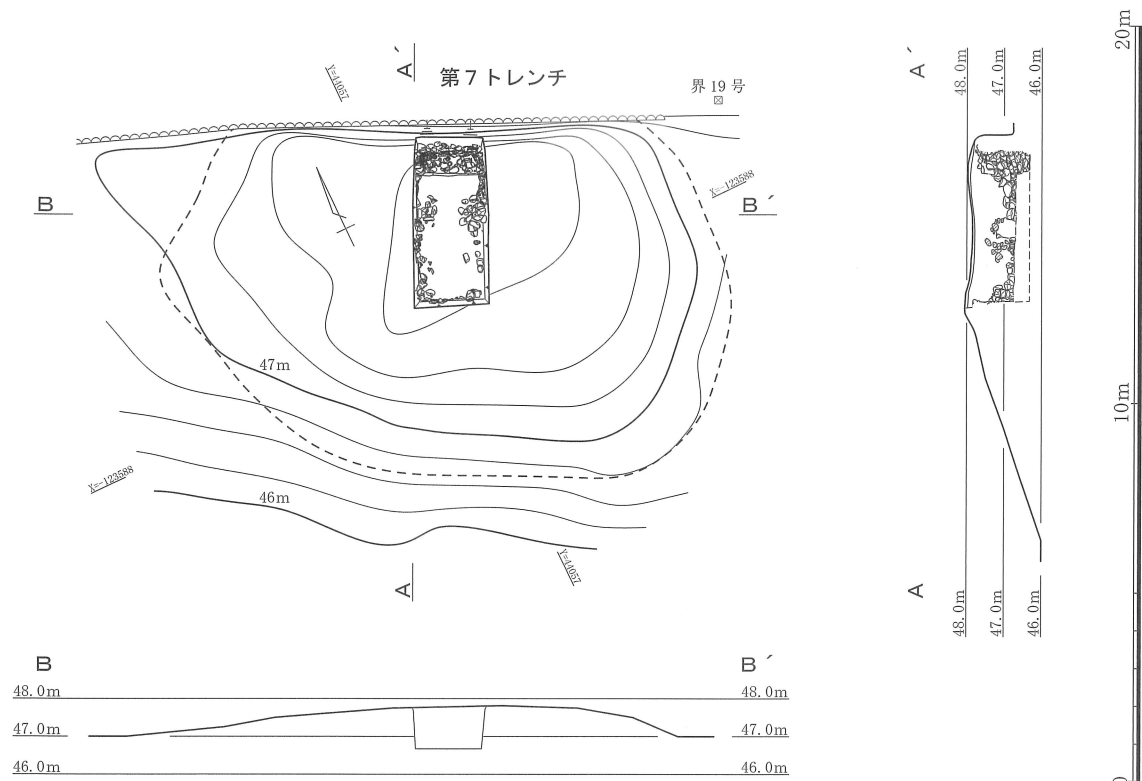
これは、第6トレンチ付近までに明瞭に確認できる改変の床面とほぼ同じ高さである。そのため、土堤内側の地山上面も外側と同様に削平された可能性も否定できない。もし、削平されているなら、本来の墳裾と墳丘周辺の地表面はもう少し高かったということになる。また、高かった場合、地山にみられた土堤状の高まりとその高低差の評価に影響を与えることとなる。当面は、能褒野墓の墳裾との関係性が不明のため、現状では一連の改変の結果同じ高さなのか、偶然同じ高さなのかという点については判断できる材料がないと言わざるを得ない。

一方で、2回目の改変は第5トレンチで平坦な面が形成された痕跡が認められるものの、全体としては不明瞭であり、第4トレンチの石敷遺構を損壊しているような状況がみられる。計画性を認めがたく攪乱のような性格が推測されるような状況といえよう。

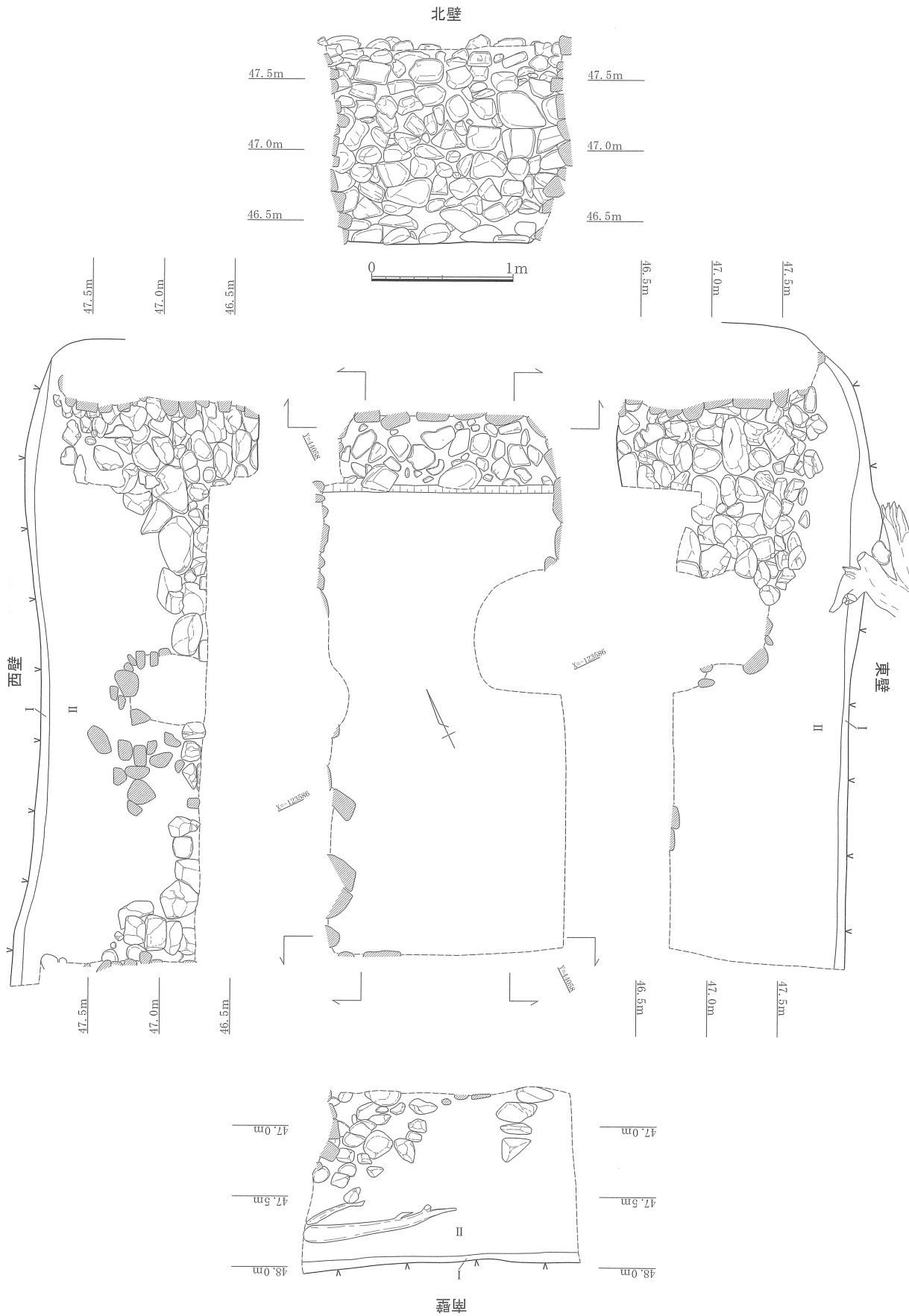
最後に、上記のうち1回目の改変により、現土堤の下で確認される地山の高まりが形成されたかどうかについて考えておこう。この点については、①第1・2トレンチの状況を積極的に評価する、②明治13年の公文書にある現土堤築成以前に見られたという小土堤の存在をこの地山の高まりに比定する、という2つの前提に基づいたならば、標高44.8～44.9mで床面を形成する過程で、一体的に造成した可能性は考えられよう。その場合、改変1回目の時期は、本墓の治定年である明治12年（1879）以前ということになる。改変2回目の時期は、現土堤を削るなど明瞭な痕跡が確認できていないことから、同12年以前か以後かについては判断できない。（清喜）

域内陪冢ろ号

第7トレンチ（第13～15図、図版4、5） 域内陪冢り号北側に、長さ4.5m×幅2mの規模で設定した。調査の結果、埋め戻された盗掘坑と横穴式石室を確認した。石室の奥壁より南へ50cmまでは、能褒野墓境界際における遺構の残存状況確認のため、石室床面まで掘削をおこなった。その結果、床面およびその近傍より須恵器が出土したため、工法の選定にあたっては、遺構への影響が少ないものとする必要があることがわかった。石室内の他部分については、床面まで埋土を掘削せず、任意の高さで止めた。



第13図 能褒野墓 域内陪冢り号平面図・断面図 (1/200)



第14図 能褒野墓 第7トレンチ平面図・立面図 (1/40)

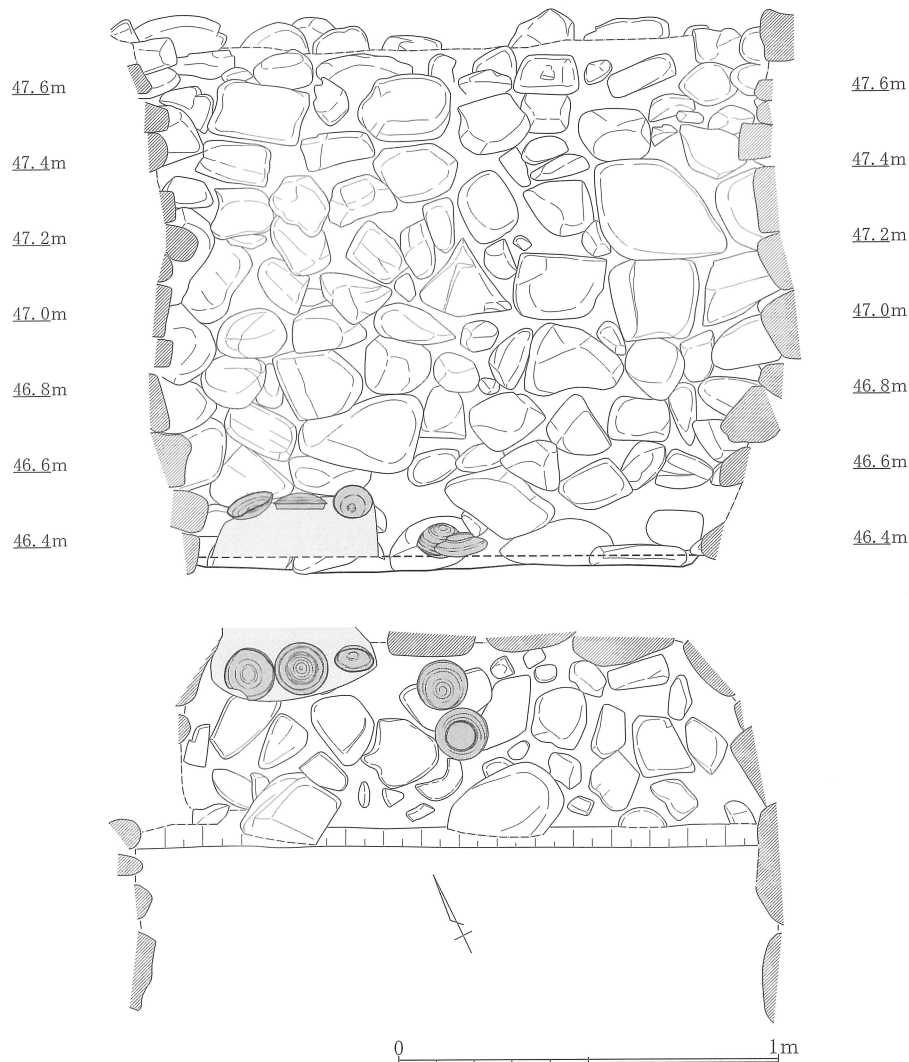
土層は、表土（Ⅰ）の下に、黒褐色の後世盛土（Ⅱ）が認められた。Ⅱ層は横穴式石室の床面から表土直下まで厚さ1.5mほど盛られていた。Ⅱ層が盛られた時期および盗掘がおこなわれた時期については、後世盛土からの出土遺物が古墳時代の須恵器のみであるため、域内陪冢築造以降としかわからない。

検出された横穴式石室は南北主軸で、奥壁および東西両側壁の一部と石敷が残存していた。石室における袖の有無については、南壁で検出された石積が部分的なものであるため、不明である。石室には丸味を帯びた石が多く使われており、その採取地は能褒野墓南方を流れる安楽川周辺の可能性がある。使用石材の大きさは、約10cmから50cmと幅があり、奥壁と側壁の基底部に特別大きな石を使うという状況はみられなかった。床面の石敷は、平坦になるよう石材の平坦面を上に向けて敷かれている。床面の高さは標高約46.3mである。

石室の構造については、部分的な調査であったため不明な点が多いが、奥壁と側壁の間には明瞭な境が見られず、1石か2石を斜めに積んで石室隅が丸くなっていることから、奥壁と側壁は同時に積んでいった状況が確認できる。石材の積み方については、明瞭な目地が確認できなかったこと、石材の大きさが統一されていないことから、ある程度不規則だったことがわかる。

石室の規模については、現状判明している数値で、玄室奥壁幅約1.3mから1.4m、玄室長3.7m以上、玄室高1.4m以上である。調査は石室部分のみの掘削であったため、域内陪冢り号の墳丘規模や墳丘形状に関する情報は得られなかった。

遺物は、後世盛土より須恵器片が1片出土しているほか、床面より須恵器の坏身と坏蓋が組み合った状態



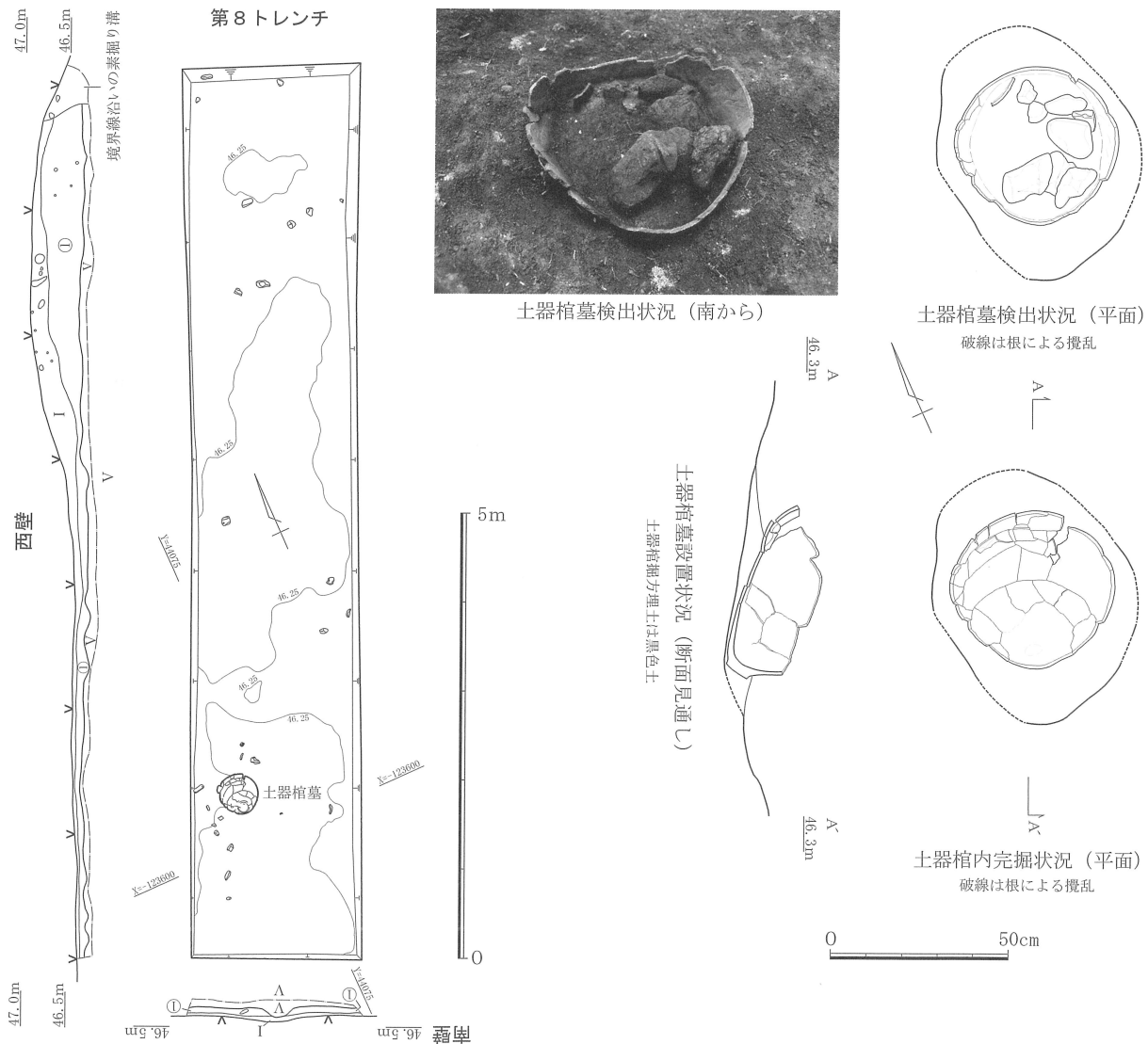
第15図 能褒野墓 第7トレンチ須恵器出土位置平面図・立面図（1/20）

のもの1組と須恵器短頸壺1個を検出した。また、埋土を間に挟んで床面からは浮いた状況であったが、奥壁沿いで須恵器坏身と坏蓋を各1個、つまみのある須恵器蓋1個も検出した。組み合った状態の坏内部には、土壌および材質不明破片が入っていた。パリノ・サーヴェイ株式会社に不明破片の分析を委託した結果、マイクログラフによる観察では土器片の可能性が高いとのことであった。(横田)

第8トレンチ (第16図、図版36) 界標20号付近に位置しており、長さ10m×幅2mの規模で設定した。調査の結果、現状で平坦な地山面と土器棺墓と考えられる遺構(以下、単に「土器棺墓」と表記)を検出した。

土層は、表土(I)の下に自然堆積層である黒色土(①)が確認された。①層は、現状ではトレンチ北端から3m付近までが厚く、もっとも厚い箇所では約0.5mを測る。南に向かって次第に薄くなり、北端から4m付近からは厚さは0.1mほどとなる。地表面に明確な段差が認められるために、現状からは人為的に削平された痕跡と考えられる。①層の下には標高46.3~46.4mで平坦な地山面(V)を検出した。また、北端は境界線に沿って掘られた近年の素掘溝の埋土が認められた。

遺構は、トレンチの南端から約2m付近で上部を削平されて、胴部から底部が残存する土器棺墓を検出した。土器棺墓の検出最高点が標高46.35mであり、これは①層の検出レベルとほぼ同じである。よって、①層が削平された際に土器棺墓も破壊されたものと考えられる。このことから、少なくとも土器棺は①層の上面から掘り込まれた掘方内に埋設されたと考えられる。掘方の平面形は不整の楕円形で、長軸約0.7m×



第16図 能褒野墓 第8トレンチ平面図・断面図、土器棺出土状況図(1/80、1/20)

短軸約 0.6 m を測る。残存する深さは 0.15 m 程度である。掘方の平面検出ラインは所々が根の影響により攪乱されていた。

土器棺は、中軸を南北方向に向けて、底部を下にした斜位で埋設されていた。ただし上半部は破壊されているため、口縁部すべてと肩部の大半が失われている（第 28 図 9）。埋設の角度は口縁部が残存しないため不明確であるが、 $40^{\circ} \sim 50^{\circ}$ と考えられる。

検出面での土器棺内部には、削平の際に流入した土とともに、破壊された土器片と長軸 0.1 ～ 0.15 m ほどの石が含まれていた。完掘の結果、土器棺内からは削平によって上から転落した土器片以外に遺物は出土しなかった。

遺物は、上記の土器棺を構成するもの以外に、第 29 図 14 に示した埴輪の胴部破片や底部・朝顔形埴輪の口縁部と考えられる破片が出土している。本墓に伴う埴輪の破片は他のトレンチでは確認されておらず、本トレンチに比較的集中する傾向が認められることには注意を要する。（清喜）

域内陪冢ち号

第 9 トレンチ（第 17 図、図版 6、7） 域内陪冢ち号北側に、長さ 5 m × 幅 2 m の規模で設定した。調査の結果、周溝と墳丘盛土と地山を確認した。墳丘盛土については流土との区別が困難で、その範囲を確認するために断ち割りをおこなった。確認の結果、域内陪冢ち号の遺構は宮内庁境界内側にあることが判明し、工法検討に有意な情報が得られた。

土層は、表土（Ⅰ）の下に、墳丘盛土が雨水等で自然流出した黒褐色の流土（Ⅲ）、黄褐色と黒褐色の墳丘盛土（Ⅳ）、黄褐色の地山（Ⅴ）が認められた。このうち、流土については墳丘盛土との違いが色の微妙な差によるものであるため、墳丘盛土の可能性も捨てきれないが、地山を掘り込んだ溝を周溝と考える限り、流土と捉えて大過ないと思われる。また、墳丘盛土は黒褐色の部分については分層が困難で、明瞭に分層できたのは盛土上部のみであった。墳丘盛土は高いところで、地山より約 1.5 m の厚さがある。地山の標高は約 46 m である。

墳丘の構築について、①まず地山に周溝を掘りこみ、墳丘の範囲を確定させてから、②黒褐色土を厚く盛り、③その上に黄褐色土と黒褐色土を不規則に盛っていた。②の黒褐色土中には間層として暗灰褐色土なども見られる。

域内陪冢ち号について、今回の調査で墳丘残存高は約 1.5 m と判明したが、周濠の検出は 1 箇所のみであるため、墳丘形状、墳丘長に関する情報は得られなかった。

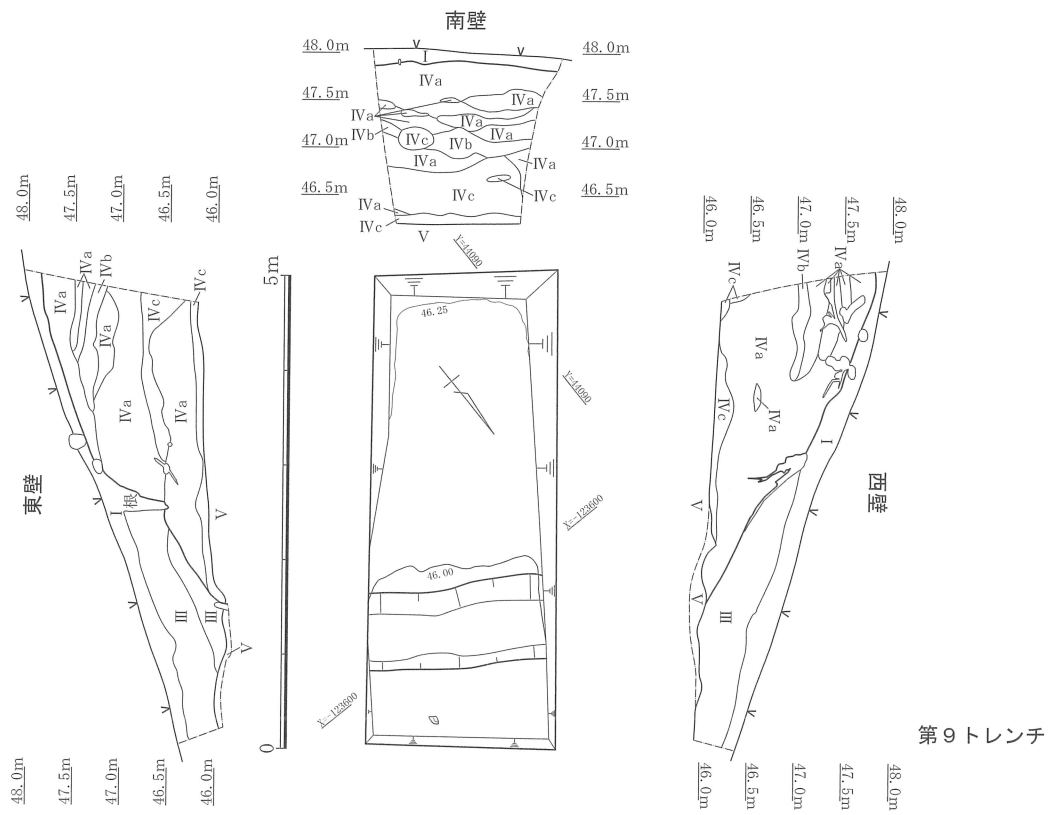
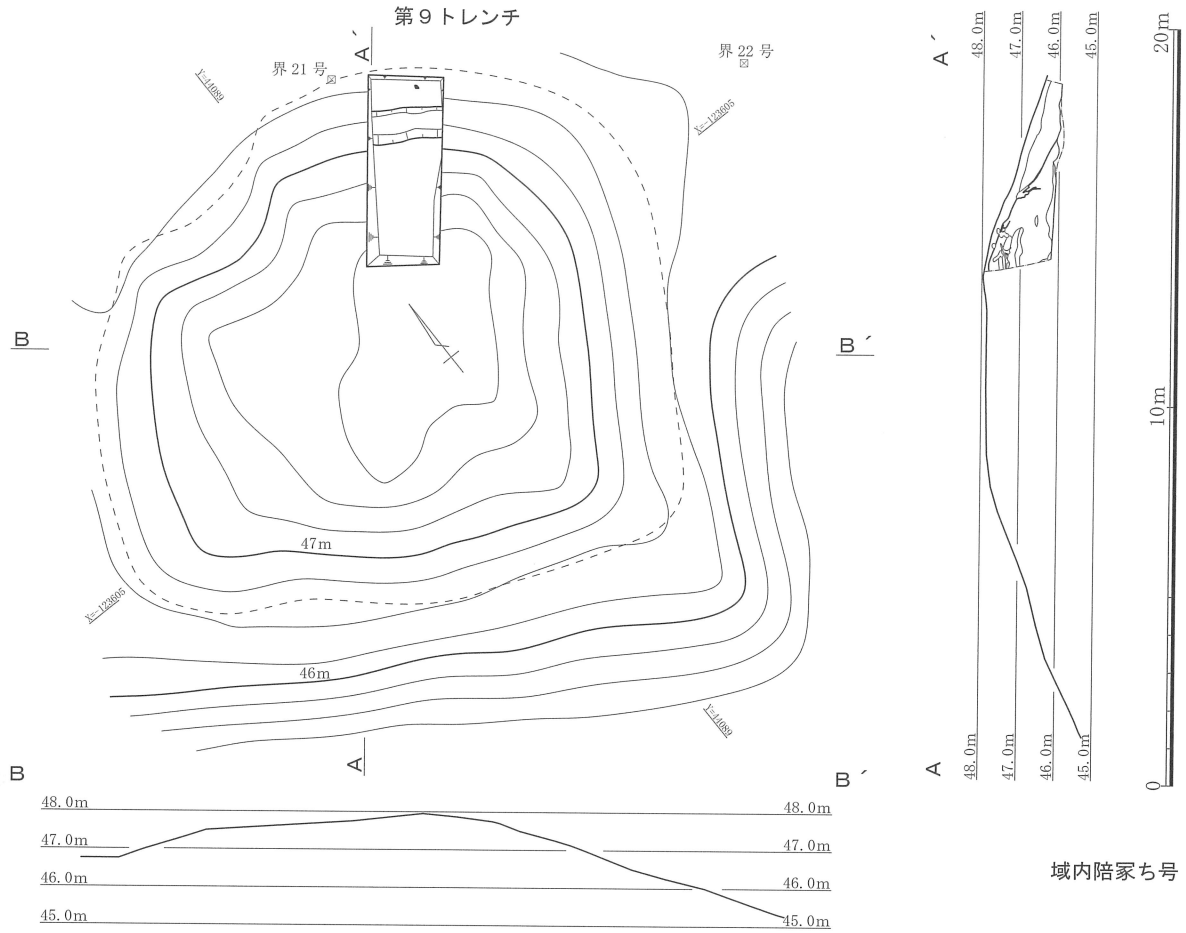
遺物は、流土より須恵器片、墳丘盛土より土師器片と須恵器片が出土した。土師器片については、小片のため弥生土器片の可能性もある。（横田）

域内陪冢と号

第 10 トレンチ（第 18 図、図版 37） 域内陪冢と号西側に、長さ 5 m × 幅 2 m の規模で設定した。調査の結果、墳丘盛土と墳頂の盗掘坑を確認した。

土層は、表土（Ⅰ）の下に、暗黒褐色土（Ⅱ）が認められるが、墳頂でも厚さ 0.2 ～ 0.4 m の厚さで全体を覆っているため、後世の盛土である可能性を考えたい。Ⅱ層の下では、墳頂において埋め戻された盗掘坑が検出されたほか、斜面部では墳丘盛土を検出した。断ち割りによって確認した墳丘構築の過程は、以下のとおりである。

まず、地山面（Ⅴ）をほぼ平坦に削り、整地している。地山面の標高は約 45.8 m である。そして墳裾近くに厚さ約 0.2 m の薄いかまぼこ状の盛土（Ⅳ d）がおこなわれている。その内側に厚さ 0.1 ～ 0.2 m の盛土（Ⅳ c）がなされる。さらにそれらの盛土全体を覆うように黒褐色の盛土層（Ⅳ b）が形成されている。この盛土は厚みがあり、もっとも厚い箇所では約 0.5 ～ 0.6 m を測る。地山直上の盛土も含めて、ここまでの盛土は大きな単位の盛土といえる。一方で、これらの盛土の上には異なる様相の盛土が認められた。まず南壁土層断面図中★印箇所からそれまでの盛土を少し掘り込んで墳丘内部に窪地を形成する。そして、その中に厚みが 5 cm ～ 20 cm ほどの細かい単位での盛土がなされている。盛土の色調は、黒褐色、黄褐色、灰褐色、褐色



第17図 能褒野墓 域内陪家ち号、第9トレンチ平面図・断面図 (1/200、1/80)

の4種類が認められるが、それぞれが連続して積まれることなく、やや不規則ながら互層が形成されている。細かい単位の盛土は埋葬施設の構築と関係した盛土であろう(IV a)。また、以上の盛土の単位は、平面的にも明瞭に検出されている。

なお、本トレンチ西端は境界線に接しているが、墳丘盛土の状況から、墳裾はわずかな距離ではあるが境界外にあると考えられる。

上記した墳丘盛土以外に遺構は認められなかった。第7トレンチでは横穴式石室が確認されたが、本トレンチの場合、盗掘坑埋土からも埋葬施設の種類や構造を推定させるような石材などは出土していない。

遺物は、流土中から土師器片が出土している。

第11トレンチ(第18図、図版38-1~4) 域内陪冢と号北側に、長さ5m×幅2mの規模で設定した。調査の結果、墳丘盛土と周溝の可能性ある掘り込みを確認した。

土層は、表土(I)の下に墳丘からの流土(III)が認められる。トレンチの北端から約3.3mの範囲は流土直下で地山(V)に至る。地山面の標高は45.8m前後である。第10トレンチと比較してやや凹凸が目立つ。墳丘にかかる南から約1.7mの範囲では、第10トレンチの盛土と同様に地山直上にまず厚さ0.1mほどの盛土(IV)がなされている。色調は灰褐色である。その上に黒褐色土の盛土(IV)が積まれている。断面からは、この盛土が地山と接する位置が現状の墳裾ということになる。

遺構は、上記した墳丘盛土以外は、墳裾から約1.2mの幅で地山が掘り込まれているように観察される箇所があり、後述する第12トレンチとの関係性から周溝である可能性が考えられる。しかし、平面的には攪乱の影響を受けている範囲が広く、検出状況としてはやや不明瞭であることは否めない。

遺物は、第29図2に示した土師器高杯の脚部破片が出土している。

第12トレンチ(第18図、図版38-5~8) 域内陪冢と号東側に、当初は長さ5m×幅2mの規模で設定して、最終的には墳丘盛土の状況を確認するために、南壁に沿って墳丘側を長さ1.5m×幅1mの規模で拡張した。調査の結果、墳丘盛土と周溝を確認した。

土層は、表土(I)の下に墳丘からの流土(III)が認められる。トレンチの東端から約3.5mの範囲は流土直下で地山(V)に至る。地山面の標高は約45.8m前後であり、凹凸が目立つ。墳丘にかかる西から約1.7mの範囲では、第10・11トレンチの盛土と同様に、地山直上にまず厚さ0.1mほどの盛土(IV)がなされている。色調は灰褐色である。その上に黒褐色土の盛土(IV)がなされている。墳裾は、墳丘盛土の端と地山の掘り込みが一致する南壁断面図中の▲印の位置としておく。そして、この位置から東側に幅約1.3mで深さ約0.2mの周溝が検出された。周溝の埋土は黒褐色を呈しており、墳丘盛土と酷似する。

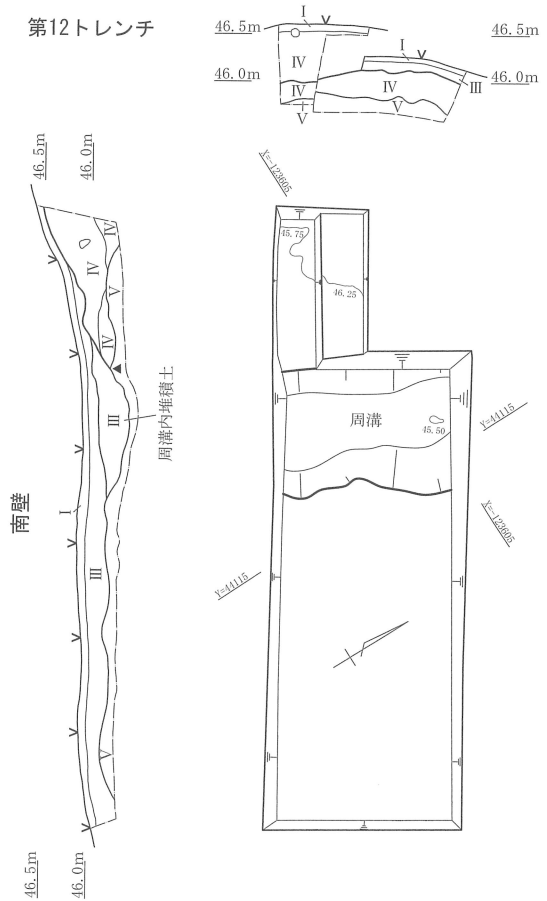
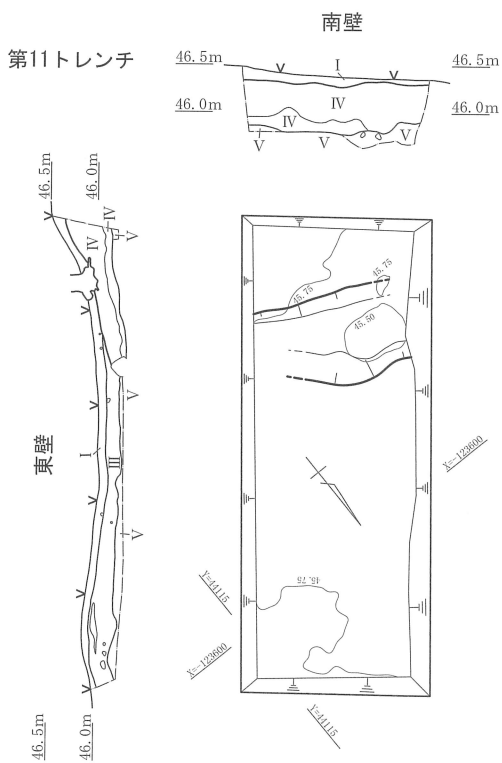
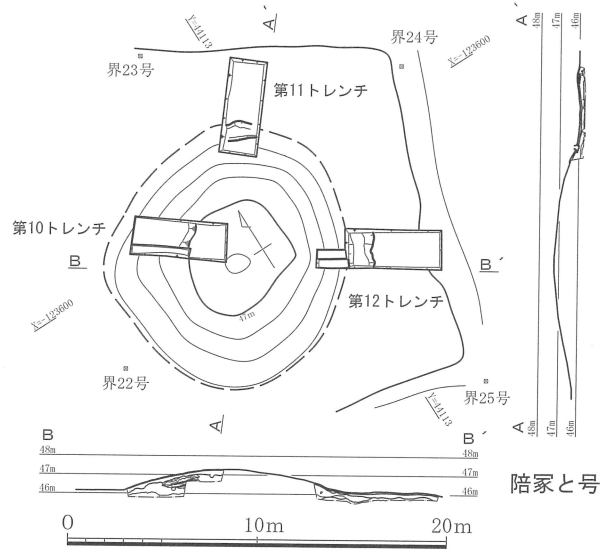
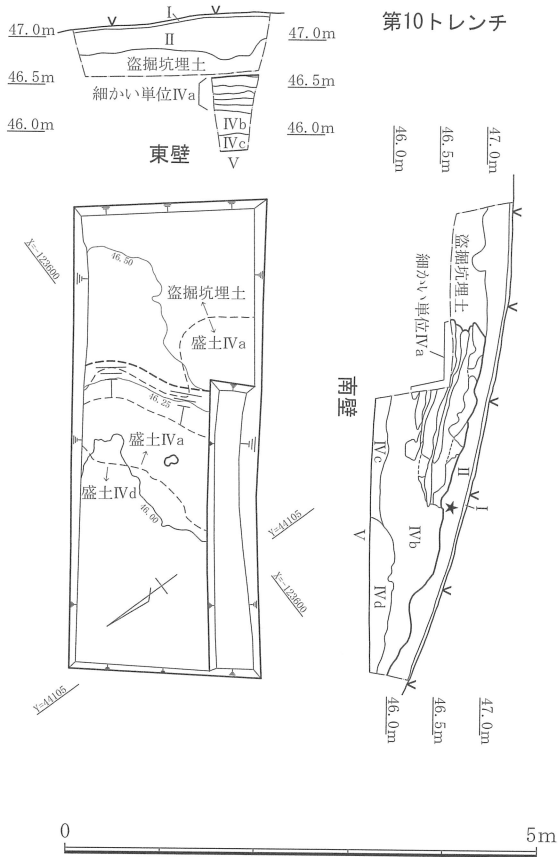
遺構は、上記した墳丘盛土と周溝以外は検出されなかった。

遺物は、周溝埋土上層から須恵器甕もしくは壺の胴部から底部にかけての破片(第30図25)などが出土している。本トレンチと第7トレンチ以外では、明確に墳丘に伴うと考えられる状態で出土した遺物はないため、域内陪冢の築造年代を推定するうえで重要な資料といえよう。

小結 最後に、第10~12トレンチの所見から域内陪冢と号の墳丘築造工程についてまとめておきたい。

墳丘築造にあたり、地山面をおおむね標高45.8mで揃えてから墳丘盛土を開始したようである。ただし、第10トレンチ以外の地山面は凹凸が認められる。周溝は、第12トレンチ(墳丘東側)において明瞭に認められ、須恵器甕もしくは壺の破片が出土している。第11トレンチ(墳丘北側)にも浅い周溝状の掘り込みが認められるが攪乱の影響もあり不明瞭である。第10トレンチ(墳丘西側)では、墳裾がトレンチ外(境界外)となるため、周溝の状況は不明である。

墳丘盛土は、まず灰褐色土・褐色土主体の盛土を、墳裾から約0.1~0.2mの厚さで敷くように設置している。中心付近は未掘のため全面であったかどうかは不明である。さらにその上に、黒褐色土を最大約0.7mの厚さで盛土する(盛土第1段階)。埋葬施設を構築する空間のために、この盛土は墳丘の中心部を廻る堤状になっていたと推測されるが、さらにその内法を削り込んで、埋葬施設の裏込とでもいえるような、不規則ながらも互層となる細かい単位の盛土がおこなわれている(盛土第2段階)。この盛土は埋葬施設の構築と並行し



第18図 能褒野墓 域内陪家は号、第10、11、12トレンチ平面図・断面図 (1/400、1/80)

ておこなわれたと推測されることから、埋葬施設の構築は、盛土第1段階の後に開始されたと考えられる。この盛土の最高点と地山面の比高は、現状で約1.2 mである。また、盗掘坑から石材などは確認されておらず、埋葬施設の形式、構造、規模等は不明である。仮に横穴式石室と考えた場合、残存する墳丘の高さはいささか低いと言わざるを得ず、本来の墳丘の高さは損なわれていると考えられよう。(清喜)

第13トレンチ (第19図、図版8) 域内陪冢へ号と域内陪冢と号の間に、長さ5 m × 幅2 mの規模で設定した。調査の結果、地山を確認した。遺構は検出されなかった。

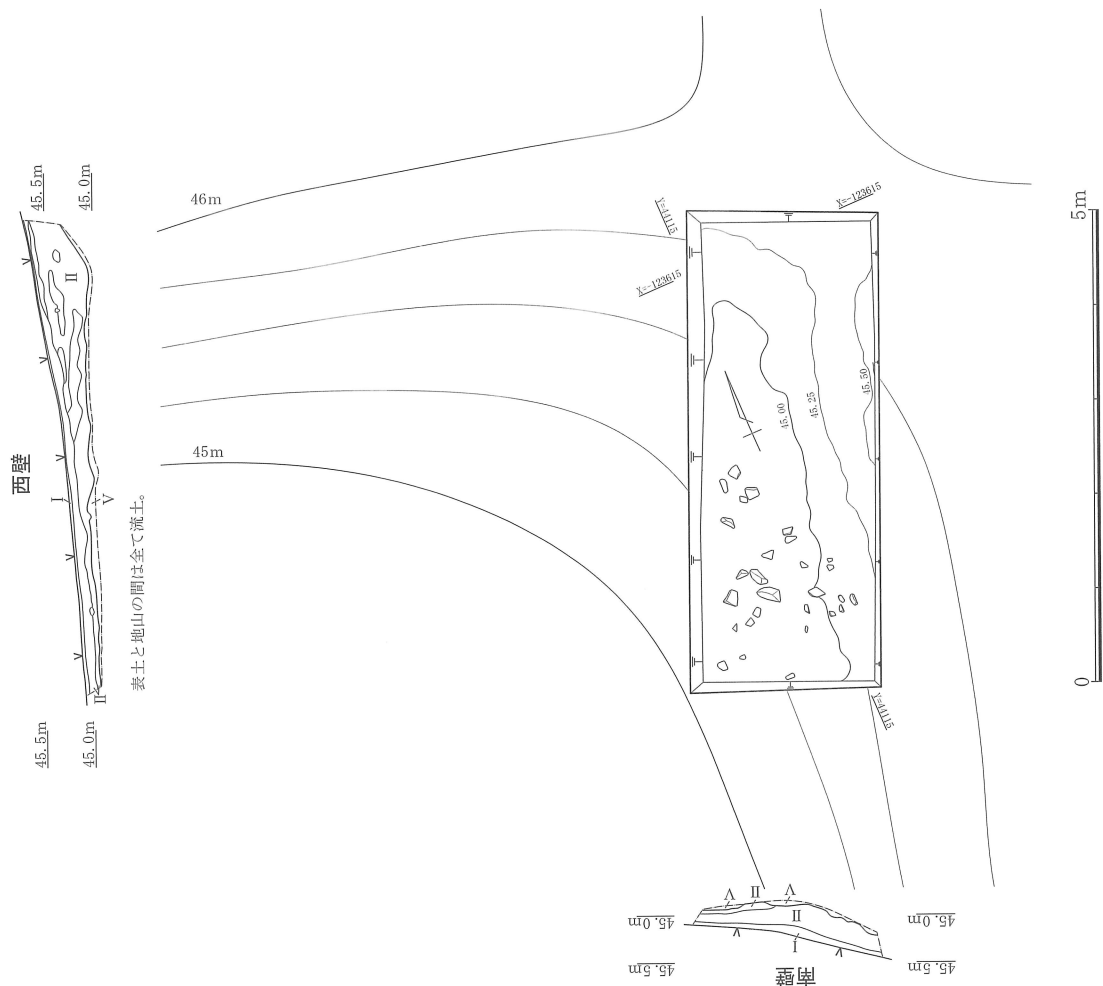
土層は、表土 (I) の下に、周囲の土壌が自然流出した流土 (III)、黄褐色の地山 (V) が認められた。現地表の斜面は、地山の形状をある程度反映したものである。地山が窪んでいる箇所に流土が堆積し、現地表は南へと下る緩やかな斜面になっている。地山の標高は約45 mから45.3 mである。

遺物は出土しなかった。

域内陪冢へ号

第14トレンチ (第20図、図版9) 域内陪冢へ号北側に、長さ10 m × 幅1 mの規模で設定した。調査の結果、浅い周溝と墳丘盛土と地山を確認した。墳丘盛土については流土との区別が困難で、その範囲を確認するために断ち割りをおこなった。確認の結果、域内陪冢へ号の遺構は宮内庁境界内側にあることが判明し、工法検討に有意な情報が得られた。

土層は、表土 (I) の下に、墳丘盛土が雨水等で自然流出した黒褐色の流土 (III)、黄褐色と黒褐色の墳丘盛土 (IV)、黄褐色の地山 (V) が認められた。このうち、流土については墳丘盛土との違いが色の微妙な差によるものであるため、墳丘盛土の可能性も捨てきれないが、地山を掘り込んだ溝を浅い周溝と考える



第19図 能褒野墓 第13トレンチ平面図・断面図 (1/80)

限り、流土と捉えて大過ないと思われる。また、墳丘盛土は黒褐色の部分については分層が困難で、明瞭に分層できたのは上部のみであった。墳丘盛土は高いところで、地山より約1.4 mの厚さがある。地山の標高は約45.6 mである。

墳丘の構築について、①まず地山に周溝を掘りこみ、墳丘の範囲を確定させてから、②黒褐色土をドーナツ状に厚く盛り、③その内側に黄褐色土と黒褐色土を薄く盛り、④墳丘の中心には黒褐色土を盛っている。ただし、④の性質については2つの可能性がある。一つは、④の黒褐色土が墳丘盛土である場合、墳丘中心部にあることから墓坑埋土という可能性である。もう一つは、④の黒褐色土が墳丘盛土でない場合、墳丘中心部にあることから、盗掘坑埋土という可能性である。

域内陪冢へ号について、今回の調査で墳丘残存高は約1.4 mと判明したが、周濠の検出は1箇所のみであるため、墳丘形状、墳丘長に関する情報は得られなかった。

遺物は、流土より縄文土器片、弥生土器片、土師器片、墳丘盛土より土師器片が出土した。土師器片については、小片のため弥生土器片の可能性もある。

域内陪冢ほ号

第15トレンチ(第21図、図版10) 域内陪冢ほ号西側に、長さ5 m × 幅2 mの規模で設定した。調査の結果、周溝と墳丘盛土と地山を確認した。墳丘盛土については流土との区別が困難で、その範囲を確認するために断ち割りをおこなった。確認の結果、域内陪冢ほ号の遺構は宮内庁境界内側にあることが判明し、工法検討に有意な情報が得られた。

土層は、表土(I)の下に、墳丘盛土が雨水等で自然流出した黒褐色の流土(Ⅲ)、暗黄褐色と黒褐色の墳丘盛土(Ⅳ)、黄褐色の地山(V)が認められた。このうち、流土については墳丘盛土との違いが色の微妙な差によるものであるため、墳丘盛土の可能性も捨てきれないが、地山を掘り込んだ溝を周溝と考える限り、流土と捉えて大過ないと思われる。地山の標高は約45.6 mである。

墳丘の構築について、①まず地山に周溝を掘りこみ、墳丘の範囲を確定させてから、②暗黄褐色土を0.1 m盛った後、③黒褐色土を厚く盛っている。墳丘の上部までトレンチが及んでいないため、墳丘上部の構築状況については不明である。

遺物は出土しなかった。

第16トレンチ(第21図、図版11) 域内陪冢ほ号北側に、長さ5 m × 幅2 mの規模で設定した。調査の結果、墳丘盛土と地山を確認した。墳丘盛土については流土との区別が困難で、その範囲を確認するために断ち割りをおこなった。確認の結果、域内陪冢ほ号の遺構は宮内庁境界外側まであることが判明し、工法検討に有意な情報が得られた。

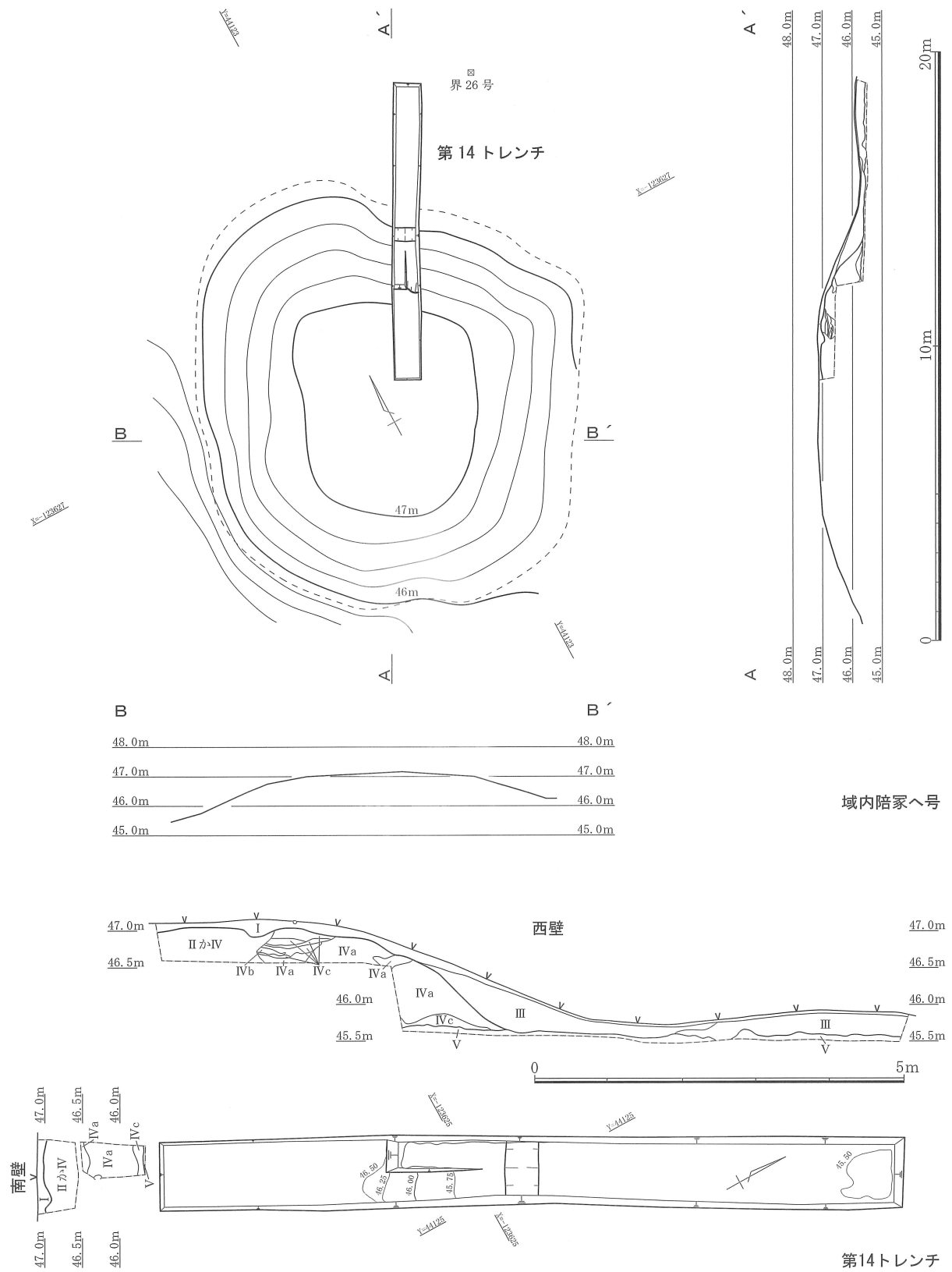
土層は、表土(I)の下に、墳丘盛土が雨水等で自然流出した黒褐色の流土(Ⅲ)、暗黄褐色と黒褐色の墳丘盛土(Ⅳ)、黄褐色の地山(V)が認められた。このうち、流土については墳丘盛土との違いが色の微妙な差によるものであるため、墳丘盛土の可能性も捨てきれないが、ここでは流土と捉えておく。墳丘盛土は高いところで、地山より約1.2 mの厚さがある。地山の標高は約45.5 mである。

墳丘の構築について、①地山上に黒褐色土をドーナツ状に厚く盛り、②墳丘頂部付近には暗黄褐色土を盛っている。①の黒褐色土中には間層として暗黄褐色土も見られる。また、②の性質については、通常の墳丘盛土以外に2つの可能性がある。一つは、②の暗黄褐色土が墳丘盛土である場合、墳丘中心部付近にあることから墓坑埋土という可能性である。もう一つは、②の暗黄褐色土が墳丘盛土でない場合、墳丘中心部付近にあることから、盗掘坑埋土という可能性である。

第15トレンチの盛土構築状況と合わせて考えると、域内陪冢ほ号、域内陪冢へ号はほぼ同様の構築順序をとっているようである。

域内陪冢ほ号について、今回の調査で墳丘残存高は約1.2 mと判明したが、周濠の検出は1箇所のみであるため、墳丘形状、墳丘長に関する情報は得られなかった。

遺物は、流土より土師器片が出土した。これについては、小片のため弥生土器片の可能性もある。(横田)



第20図 能褒野墓 域内陪冢へ号、第14トレンチ平面図・断面図 (1/200、1/80)

域内陪冢ろ号

第17トレンチ(第22図、図版12) 陪冢ろ号の北側に、長さ5.0m×幅2.0mの規模で設定した。調査の結果、界票29号付近の墳丘面を確認し、その残存状況を明らかにした。

表土(I)の下に暗灰褐色土(II)が認められる。これは斜面に0.4m近く堆積しているところもあるため、後世の盛土である可能性が考えられる。墳頂においては、暗茶褐色土を確認した。これは盛土(IV)の上から掘り込まれており、トレンチ平面にもその土層の変化が現れている。おそらくこれは盗掘坑埋土であろう。

表土下0.1～0.3mからは墳丘盛土(IV)を確認した。墳丘面はかなり攪乱されていたようで上面は凸凹である。墳裾付近で盛土の特徴を観察することができた。地山(V)が平坦に削られ、その上に暗灰褐色(IVc)の盛土が厚さ0.2mほど積まれる。そして、その上に厚さ0.4mほどの黒褐色(IVa)の盛土が厚く土手状に積まれる。そして墳丘中心に向かって、厚さ0.1m未満の薄い暗黄褐色土(IVb)が、水平に細かい単位で積まれる。墳頂付近は削られた部分が多く盛土を確認しにくい、部分的に薄い暗黄褐色土(IVb)が水平に積まれている様子が確認できる。なお、墳裾はトレンチ端よりも外側であったと思われる。

トレンチ下端では、後世の土塁(II)を確認した。土塁は陪冢ろ号からろ号にかけて目視することができ、土塁は6層からなっており、暗褐色系の土と地山起源の黄褐色土を水平に0.8mほど積み重ねることで作られている。地山起源の土が含まれていることから、この土塁は陪冢ろ号前の道路が作られた際のものであると思われる。標高45.4mで地山(V)を確認した。

遺物は、II層から土器片が少数出土した。小片であり、詳細は不明である。

第18トレンチ(第22図、図版13) 陪冢ろ号の東側に、長さ5.1m×幅2.0mの規模で設定した。調査の結果、界票29号付近の墳丘面を確認し、その残存状況を明らかにした。

表土(I)の下に後世の盛土と考えられる暗灰褐色土(II)が認められる。これは、斜面に0.2～0.3m近く堆積している。表土下0.1～0.3mからは墳丘盛土(IV)を確認した。第17トレンチと比べると墳丘面は良好に残存しており、盛土の特徴を観察することができた。墳裾付近では0.3mほどの厚みの大きな単位で黒褐色土(IVa)が積まれる。そして墳丘中心に向かって、暗黄褐色(IVb)と黒褐色(IVa)の土が互層となって積まれている。暗黄褐色土(IVb)を主としている。第17トレンチでは黒褐色土(IVa)を主としていたのとは対照的である。同じ墳丘でも場所によって盛土の様相は異なっていたようである。なお、墳裾はトレンチ端よりも外側であったと思われる。

標高45.1m付近で地山面(V)を確認した。トレンチ下端から0.7mほど墳丘側には地山を掘り込んだ痕を確認した。掘り込み幅は0.9mほどである。掘り込み内には0.2mほど暗灰褐色土が堆積している。この上で盛土(IVa)が確認できることから周溝とは考えにくい。盛土をする前に地山を溝状に掘り込んでいたかと思われる。古墳築造前の痕跡である可能性も考えられるだろう。

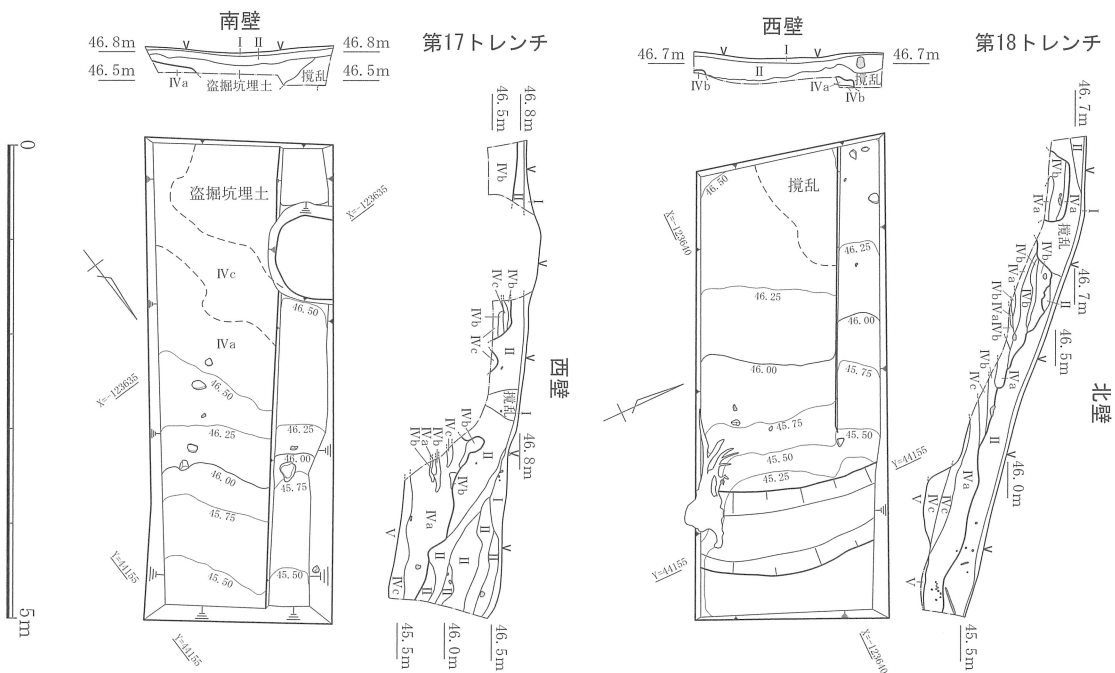
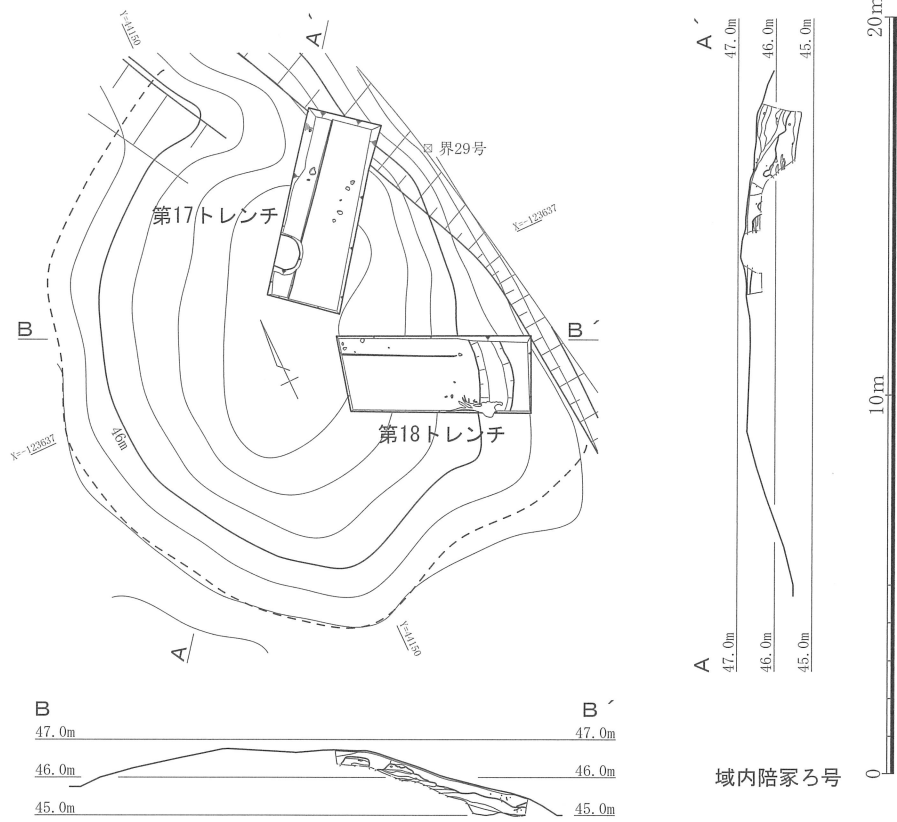
遺物は、II層から弥生土器片が多数出土した。壺(第29図12、13)、高杯の脚部などが確認できる。また、盛土(IV)の断割からは土師器甕片が出土した。

小結 陪冢ろ号は直径14mほどの円墳に復元される。後世に盛土された部分もあるが、墳丘高は1.5mほどである。第17トレンチと第18トレンチでは陪冢ろ号の墳丘盛土の特徴を観察することができた。共通していえることは、墳丘築造前に地山を水平にしている点、そして墳裾付近で厚く大きな単位で黒褐色土を土手状に積み、墳丘中心に向かって暗黄褐色土と黒褐色土を互層に積む点である。ただし、その土は第17トレンチでは黒褐色土、第18トレンチでは暗黄褐色土を主としている点で違いがある。

第19トレンチ(第23図、図版39) 陪冢い号とろ号の間のトレンチで、5.3m×5.3mである。陪冢い号とろ号の間の墳丘の有無を確認するために設定したトレンチである。調査の結果、遺構面は確認できなかった。

土層の状況は、表土(I)の下に流土(III)が0.1～0.3mほどみられ、その下は地山面(V)であった。地山はほぼ平坦であり、陪冢い号とろ号の間に墳丘はなかったようである。地山面の標高は約45.1mである。

遺物は、II層から内黒焼成による黒色土器片が出土した。



第22図 能褒野墓 域内陪冢ろ号、第17、18トレンチ平面図・断面図 (1/200、1/80)

域内陪冢い号

第20トレンチ(第24図、図版14) 陪冢い号の東側に、長さ5.5m×幅2.0mの規模で設定した。調査の結果、界票30、31号付近の墳丘面を確認し、その残存状況を明らかにした。

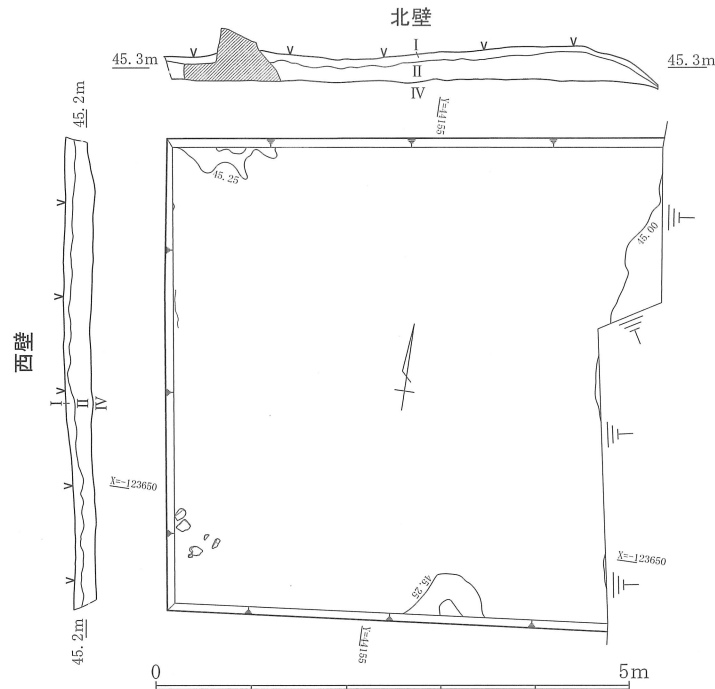
第20トレンチと第21トレンチの間の墳頂から墳丘斜面にかけては、墳丘面が攪乱されており、本トレンチもその影響を受けている。表土(I)の下に後世の盛土と考えられる暗灰褐色土(II)が認められる。厚いところでは1.2mほどが堆積しており、トレンチ下端では地山直上にも達している。これは墳丘盛土が攪乱された際の土である可能性があるだろう。表土下0.3~0.8mから墳丘盛土(IV)を確認した。攪乱などでトレンチ北側の墳丘面が乱れていたが、断ち割り部分では盛土の様子を観察することができた。墳裾と地山面との境は標高45.0m付近である。陪冢い号の東側に道が作られる際、地山面はかなり削られたようである。墳裾付近から墳頂付近まで黒褐色土(IVa)と暗黄褐色土(IVb)が概ね互層状に積まれる。黒褐色土(IVa)が主であるようである。また、墳頂付近の盛土中から長軸10cm前後の石を複数確認した。性格はよくわからないが、埋葬施設にともなう石であった可能性も考えられる。

遺物は、表土(I)から現代の薬瓶とともに弥生土器の口縁部片が出土した。また、盛土(IV)中からは、弥生土器片が少数出土した。

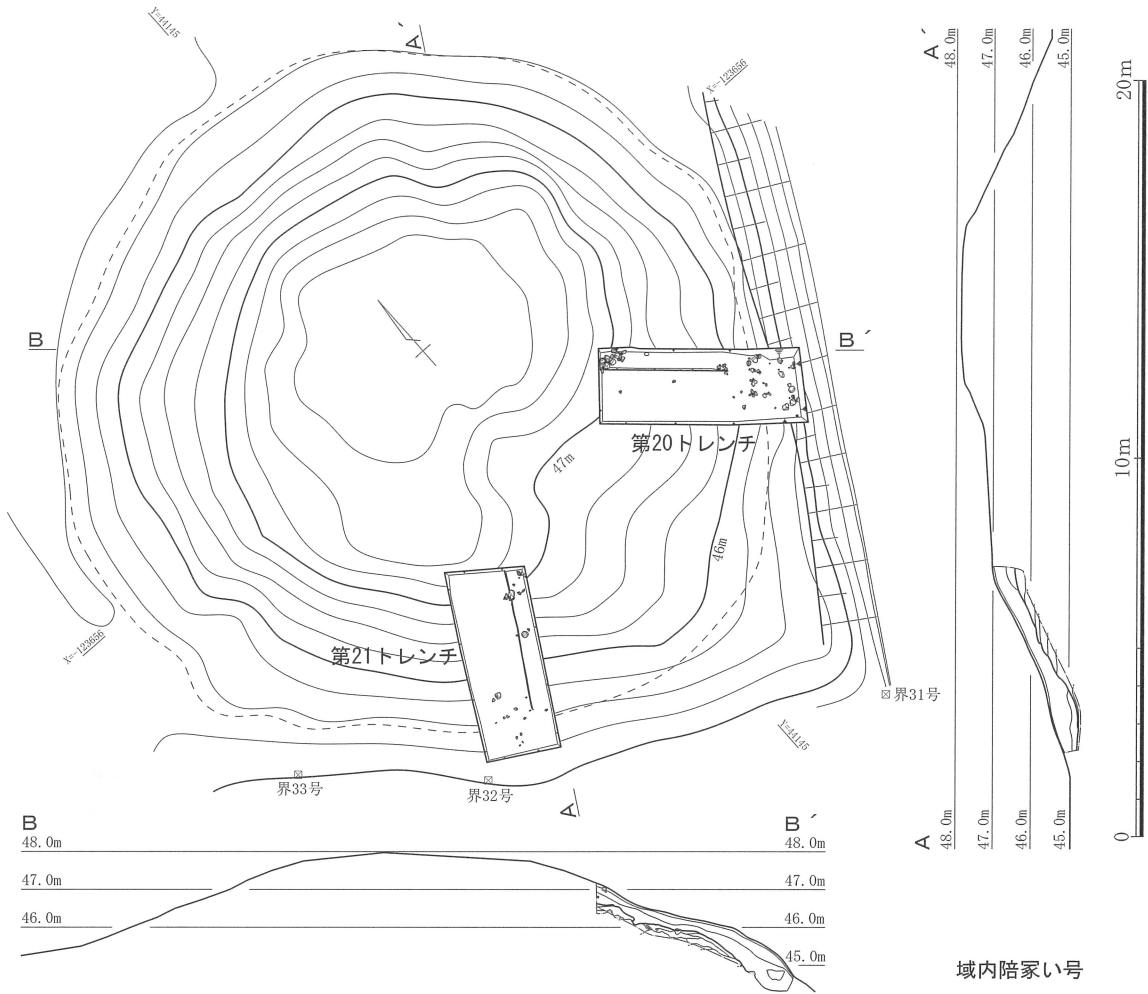
第21トレンチ(第24図、図版14) 陪冢い号の南側に、長さ5.1m×幅2.1mの規模で設定した。調査の結果、界票32号付近の墳丘面を確認し、その残存状況を明らかにした。

第20トレンチと第21トレンチの間にある攪乱の影響を本トレンチも受けている。表土(I)の下に後世の盛土と考えられる暗灰褐色土(II)が認められる。これは墳頂では1m近く、墳裾では0.5m近くが堆積している。攪乱された際の土が本トレンチ周辺に積まれたものと思われる。また、墳頂付近のII層中からは長軸0.1mほどの石材が数点検出された。これは埋葬施設に由来するものである可能性がある。さらに、掘削付近には及んでいないが、墳丘斜面の中ほどにも大きな攪乱がみられる。攪乱土中からは現代に近い陶器、播鉢片、棧瓦片などが出土していることから、現代の攪乱であろう。

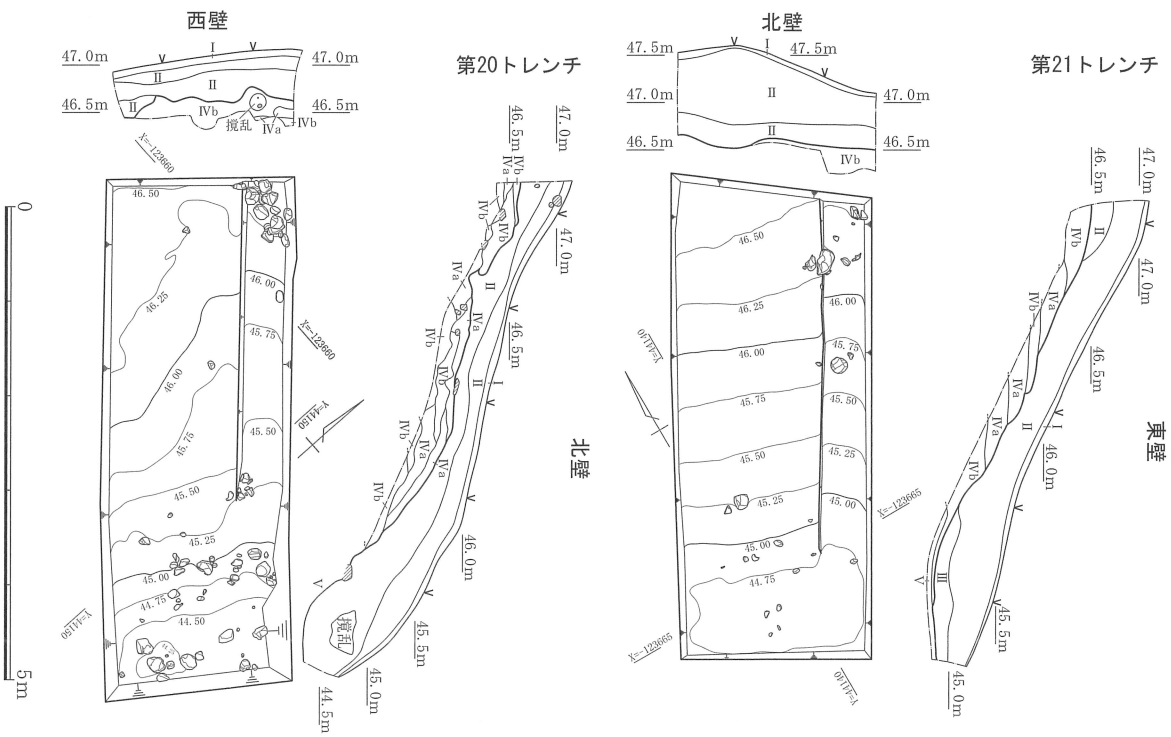
表土下0.4~0.6mからは、墳丘盛土(IV)を確認した。第20トレンチと比べると、盛土面は凹凸が少ない。墳裾から斜面にいたるまで、暗黄褐色土(IVb)と黒褐色土(IVa)が0.1mほどの厚みで互層になりながら積まれる。第20トレンチと盛土の特徴は共通しているが、第21トレンチは黄褐色土(IVb)が主である。



第23図 能褒野墓 第19トレンチ平面図・断面図 (1/80)



域内陪冢い号



第24図 能褒野墓 域内陪冢い号、第20、21トレンチ平面図・断面図 (1/200、1/80)

墳裾はトレンチ下端よりもやや外側であったと思われる。標高 44.8m 付近で地山面（V）を確認した。

小結 陪冢い号は直径 18.7 m ほどの円墳に復元される。墳頂付近に後世の盛土（II）が積まれており、さらに墳裾付近の地山面が後世にかなり削られている。能褒野墓の陪冢の中でも最も高い墳丘に見えるが、実際はそれほど高い墳丘ではなく、墳丘高 2 m 以下の高さであったのではないかと推測される。

第 20 トレンチでは主に黒褐色土（IV a）が使われていたが、第 21 トレンチでは主に暗黄褐色土（IV b）が主に使われていた。同じ墳丘であっても、場所によって盛土の仕方が異なっていたようである。

第 22 トレンチ（第 25 図、図版 39） 陪冢い号とは号の間に、5.1 m × 2.0 m の規模で設定した。陪冢い号とは号の間がやや高くなっており、墳丘が存在していた可能性があったため、墳丘の有無を確認するために設定したトレンチである。調査の結果、遺構面は確認できなかった。

表土（I）の下に根攪乱の層を厚さ 0.4m ほどにわたって確認した。表面がやや高くなっているところは根攪乱層である。根攪乱層の下には流土（III）が 0.1 ~ 0.5m ほどみられ、ここからは弥生土器の破片が出土した。鉢、壺の口縁部などを確認している。さらに、弥生土器に混じって縄文土器の破片と棧瓦の破片と思われるものも出土した。遺構面は確認されなかったが、含まれる遺物から付近に縄文時代、弥生時代の住居址が近くにあった可能性がある。表土下 0.4 ~ 0.8m からは地山（V）を確認した。場所によって地山の高さが異なるのは、根攪乱によって地山が乱されたためであると思われる。トレンチ南側では、流土（III）、地山（V）ともに低くなっている。トレンチ南側の広場が作られた際に削られたものであるかと思われる。

このように、高くなった部分は根攪乱と後世の削り込みに起因するものであり、人為的なものではないと思われる。

第 23 トレンチ（第 25 図、図版 40） 界標 34 号と 35 号の間に、長さ 5.1 m × 幅 2.1 m の規模で設定した。界標 34 号と 35 号の間の遺構の有無を確認するために設定したトレンチである。調査の結果、遺構面は確認できなかった。

表土（I）の下に流土（III）が 0.2 ~ 0.3 m ほどみられ、その下は地山（V）であった。地山はほぼ平坦であり、トレンチ南側では地山上からの 1.3 × 0.9m ほどの掘り込みがみられた。

遺物は出土せず、遺構かどうかは不明である。

第 24 トレンチ（第 25 図、図版 40） 界標 35 号と 36 号の間に、長さ 5.1 m × 幅 2.0 m の規模で設定した。界標 35 号と 36 号の間の遺構の有無を確認するために設定したトレンチである。調査の結果、遺構面は確認できなかった。

表土（I）の下に流土（III）が 5 cm ほどみられ、その下は地山（V）であった。地山はほぼ平坦であり、トレンチ南側には直径 0.8m ほどの地山の掘り込みが 3 箇所みられた。

遺物は出土せず、遺構かどうかは不明である。

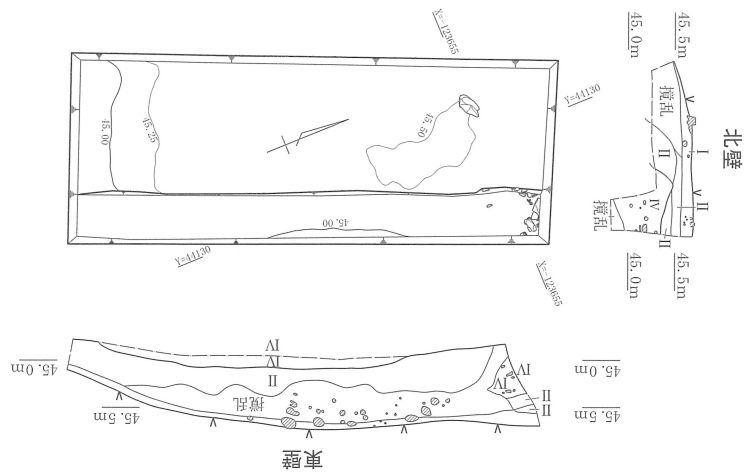
飛地に号

第 25 トレンチ（第 26 図、図版 41） 飛地に号の西側に、長さ 3.1 m × 幅 2.1 m の規模で設定した。調査の結果、飛地に号の墳丘の構造および残存状況を明らかにした。

表土（I）の下に後世の盛土と考えられる厚さ 0.3 ~ 0.4 m の暗灰褐色土（II）がみられ、その下から墳丘盛土（IV）を確認した。墳裾には 0.2 m ほどの暗褐色土（IV b）が水平に積まれ、その上で黒褐色土（IV a）と暗黄褐色土（IV b）が 0.2 m ほどの間隔で互層に積まれている。標高 45.6m 付近で地山面（V）を確認した。遺物は出土しなかった。

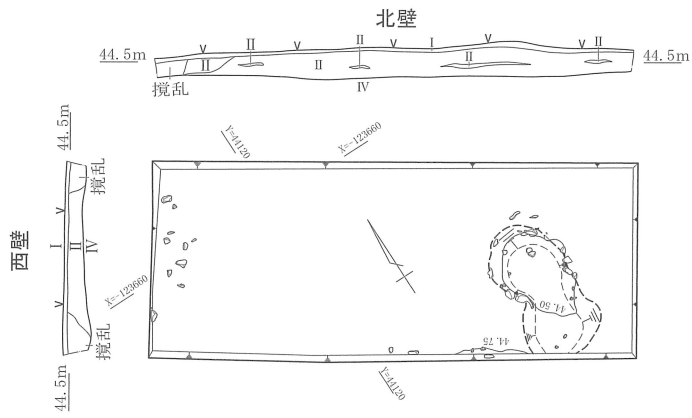
第 26 トレンチ（第 26 図、図版 41） 飛地に号の北側に、長さ 3.0 m × 幅 2.1 m の規模で設定した。調査の結果、飛地に号の墳丘の構造および残存状況を明らかにした。

トレンチ下半分が地山面（V）まで大きく削られており、後世の盛土（II）と思われる薄い黒褐色土が厚く堆積している。墳頂に近いトレンチ上半分からは墳丘盛土（IV）を確認した。トレンチの中ほどで確認できる盛土は黒褐色（IV a）で水平に積まれおり、墳頂付近では褐色の盛土（IV b）が 0.1 ~ 0.2 m ほど水平に積まれている。墳裾は大きく削られているため明らかではない。標高 45.7m 付近で地山面（V）を確認した。

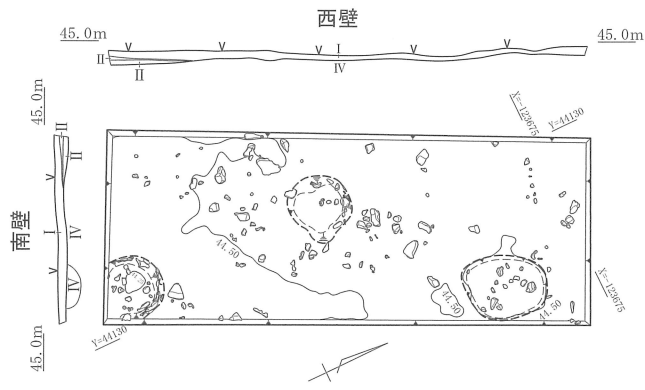


東壁

第22トレンチ



第23トレンチ



第24トレンチ



第25図 能褒野墓 第22、23、24トレンチ平面図・断面図 (1/80)

遺物は、後世の盛土（Ⅱ）から縄文土器口縁部片（第28図7）などが少数出土した。

第27トレンチ（第26図、図版42） 飛地に号の東側に、長さ3.2m×幅2.1mの規模で設定した。調査の結果、飛地に号の墳丘の構造および残存状況を明らかにした。

表土（Ⅰ）の下に後世の盛土と考えられる明黒褐色土（Ⅱ）がみられ、これが0.2～0.5mほど厚く堆積している。墳裾では地山面（Ⅴ）が削られており、Ⅱ層が堆積している。墳裾は標高45.7m付近で、それよりも上から盛土（Ⅳ）が確認できる。墳裾付近には黒褐色土（Ⅳa）が厚さ0.3mほど積まれており、それよりも上では暗黄褐色土（Ⅳb）と互層になってほぼ水平に積まれていく。墳頂付近では、暗黄褐色土と黒褐色土が落ち込む様子が確認できる。この落ち込みは墳頂付近であることから、埋葬施設の墓坑ラインを反映したものである可能性がある。

遺物は出土しなかった。

第28トレンチ（第26図、図版42） 飛地に号の南側に、長さ3.1m×幅2.1mの規模で設定した。調査の結果、飛地に号の墳丘の構造および残存状況を明らかにした。

表土（Ⅰ）の下に、後世の盛土と考えられる暗灰褐色、明黒褐色土（Ⅱ）がみられ、表土下0.2～0.3mから墳丘盛土（Ⅳ）を確認した。墳裾付近は、地山面（Ⅴ）まで削られている。墳裾には暗茶褐色土（Ⅳb）が水平に積まれ、それよりも上では黒褐色土（Ⅳa）が主となって積まれて墳丘が形成される。黒褐色土には部分的に暗黄褐色土（Ⅳb）が混じっている。

遺物は出土しなかった。

小結 飛地に号は墳裾が削られており正確な墳形を判断するのは難しいが、トレンチ平面の盛土面をみるかぎり内彎する様子はみられず、方墳と考えるのが自然である。また墳丘長も判断が難しいが、一辺5.0mほどであったと思われる。墳丘上には他のトレンチと同様に後世の盛土（Ⅱ）がみられ、地山面（Ⅳ）と盛土面（Ⅲ）の間の高さは約0.8mである。盛土は全体としては黒褐色土（Ⅳa）が主であるが、暗黄褐色土（Ⅳb）が黒褐色土と互層状に確認できる点の特徴である。

飛地ほ号

第29トレンチ（第27図、図版43） 飛地に号の西側、長さ3.0m×幅2.0mの規模で設定した。調査の結果、飛地ほ号の墳丘の構造および残存状況を明らかにした。

表土（Ⅰ）の下に後世の盛土（Ⅱ）と考えられる暗灰褐色土と明黒褐色土がみられ、表土下0.1～0.5mから墳丘盛土（Ⅳ）を確認した。墳丘盛土は、ほぼ黒褐色土（Ⅳa）のみからなる。墳裾は、地山面（Ⅴ）とともに大きく削られている。標高45.4m付近で地山面（Ⅴ）を確認した。地山面は水平であり、整地されたものと思われる。

遺物は、流土（Ⅱ）中から弥生土器の口縁部片と底部片が出土した。

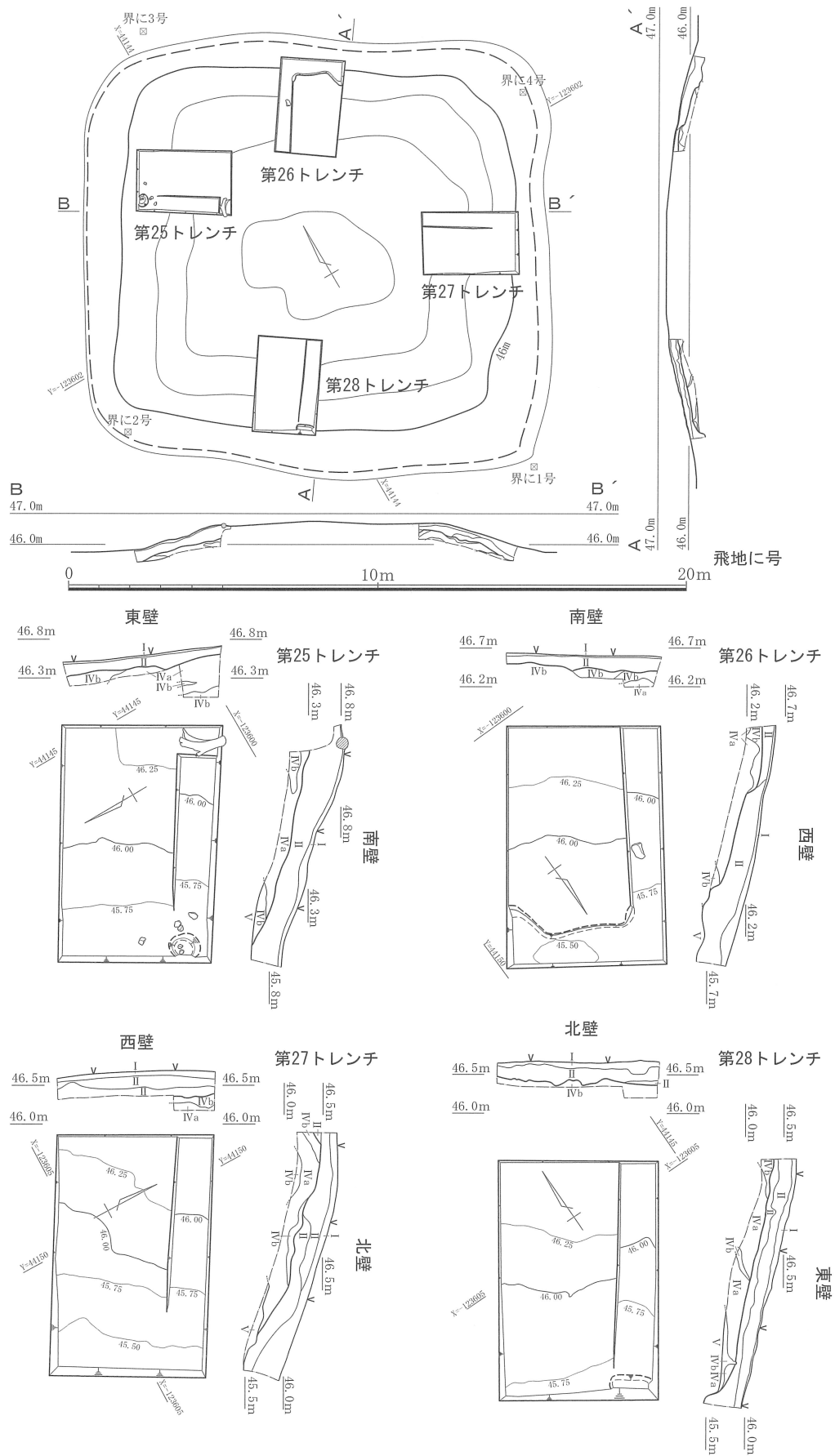
第30トレンチ（第27図、図版44） 飛地に号の北側に、長さ3.0m×幅2.0mの規模で設定した。調査の結果、飛地ほ号の墳丘の構造および残存状況を明らかにした。

表土（Ⅰ）の下に後世の盛土（Ⅱ）と考えられる暗灰褐色を中心とする土がみられ、表土下0.15～0.5mから墳丘盛土（Ⅳ）を確認した。墳丘盛土は、やはりほぼ黒褐色（Ⅳa）のみからなる。墳裾は、地山面（Ⅴ）とともに大きく削られており、後世の盛土（Ⅱ）が厚く堆積している。標高45.4m付近で地山面（Ⅴ）を確認した。地山面はやはり水平に整地されていると思われる。

遺物は、後世の盛土（Ⅱ）から土器片が少数出土した。小片であり、詳細はわからない。

第31トレンチ（第27図、図版44） 飛地に号の東側に、長さ3.0m×幅2.0mの規模で設定した。調査の結果、飛地ほ号の墳丘の構造および残存状況を明らかにした。

表土（Ⅰ）の下に後世の盛土（Ⅱ）と考えられる明黒褐色土がみられ、表土下0.1～0.4mから墳丘盛土（Ⅳ）を確認した。トレンチ下端が大きく削られているため確認しにくい。墳裾は標高45.3m付近であったと思われる。墳裾から墳頂にかけて大部分の盛土は黒褐色土（Ⅳa）であるが、トレンチ上側では黒褐色土よりも下に暗褐色土（Ⅳc）を確認した。標高45.3mに以下は地山面である。地山面は墳丘盛土下に水平にみられ、



第26図 能褒野墓 飛地に号、第25、26、27、28トレンチ平面図・断面図 (1/200, 1/80)

やはり地山を整形していたものと思われる。

遺物は出土しなかった。

小結 飛地に号は墳丘高が低く、現地表面では墳形と墳裾が明確ではない。調査の結果、どのトレンチにおいても墳裾付近は削られており、本来の状況を保ってはいなかった。得られた情報からは判断が難しいが、直径2.5 mほどの円墳であったかと思われる。墳丘高は高いところでも0.65 mであり、きわめて低い墳丘である。墳丘盛土はほぼ黒褐色土（IV a）からなり、互層状の積み方は確認できない。地山面（V）は水平に整形されていたようである。（土屋）

3 出土遺物

(1) 縄文土器（第28図、図版45）

古墳盛土や地山直上において、縄文土器がわずかに検出された。全て凸帯文系土器様式の深鉢である。ここでは情報量の多い口縁部付近の破片を中心に図化をおこなった。なお、ここでは鈴木克彦氏による属性分析を参考にした⁽²²⁾。

1は、第7トレンチ石室埋土内（II）から出土した。口縁部もしくは肩部につく凸帯文が残存していた。器形は欠損部分が大きいので、よくわからない。凸帯上の刻目は、施文原体が二枚貝の腹縁・外面以外のA類で、平面形態は横長のO字形を呈するO型である。外面、内面ともに明赤褐色を呈する。

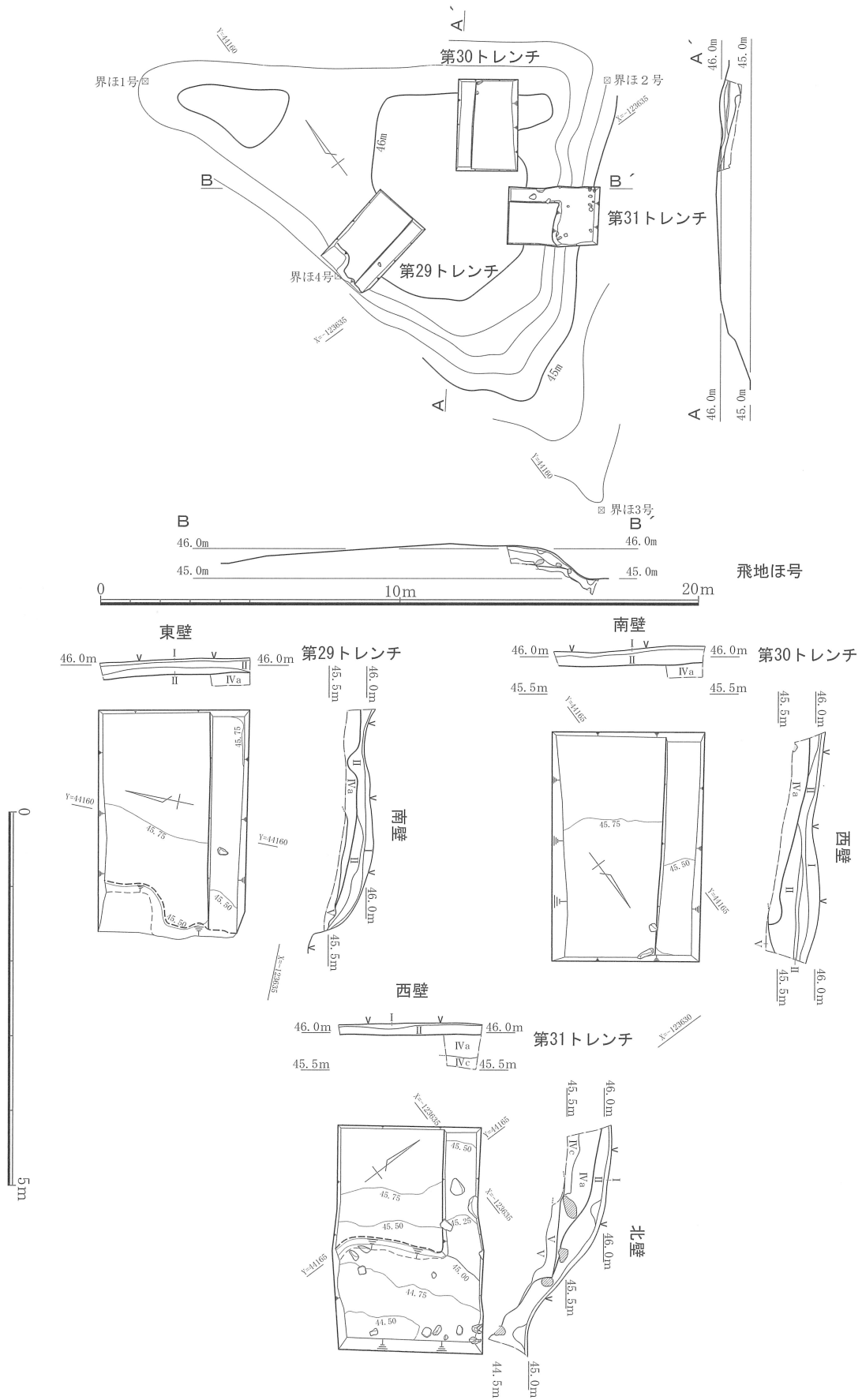
2～5は、第8トレンチ土器棺近くの流土中（III）から出土した。口縁部もしくは肩部につく凸帯文が残存していた。器形は欠損部分が大きいので、よくわからない。凸帯上の刻目は、施文原体が二枚貝の腹縁・外面であると思われるB類で、平面形態は横長のO字形を呈するO型である。2～4は外面、内面ともに灰褐色を呈する。5は、外面が灰褐色、内面が赤褐色である。

6は、第9トレンチ墳丘盛土内（IV）から出土した。口縁部もしくは肩部につく凸帯文が残存していた。器形は欠損部分が大きいので、よくわからない。凸帯上の刻目は、施文原体が二枚貝の腹縁・外面以外のA類である。平面形態が横長のO字形を呈するO型とD字形を呈するD類の間のような形態である。外面、内面ともに黒褐色を呈する。

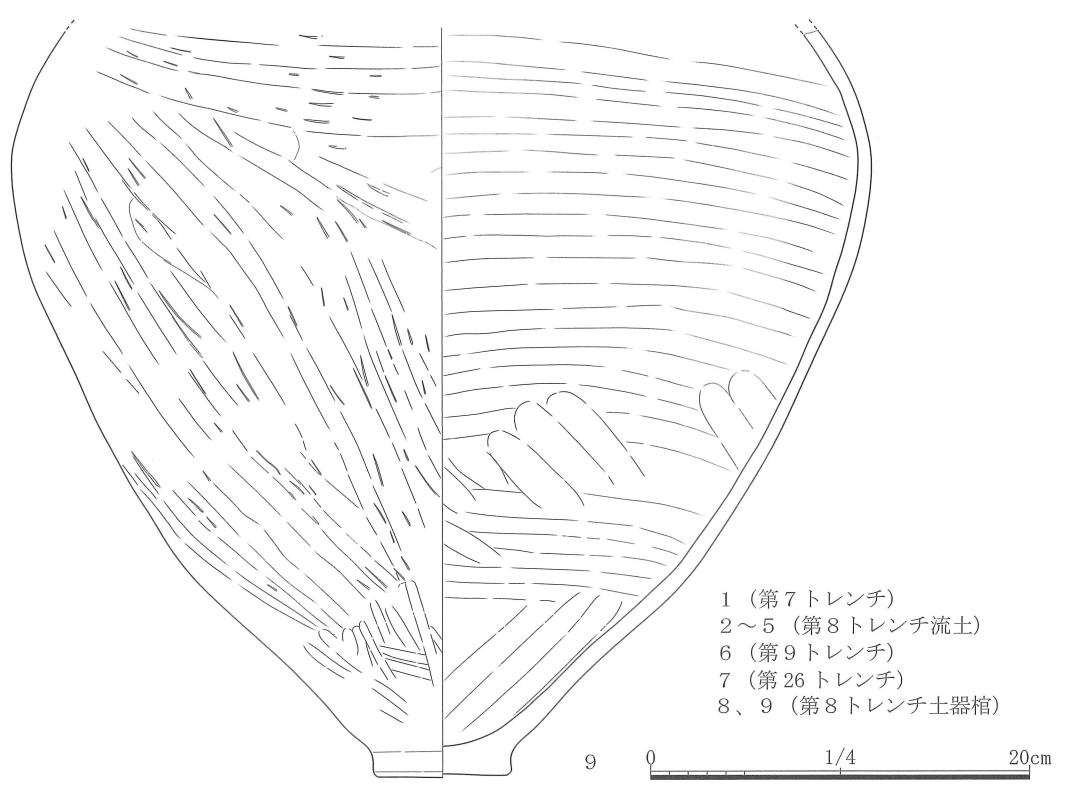
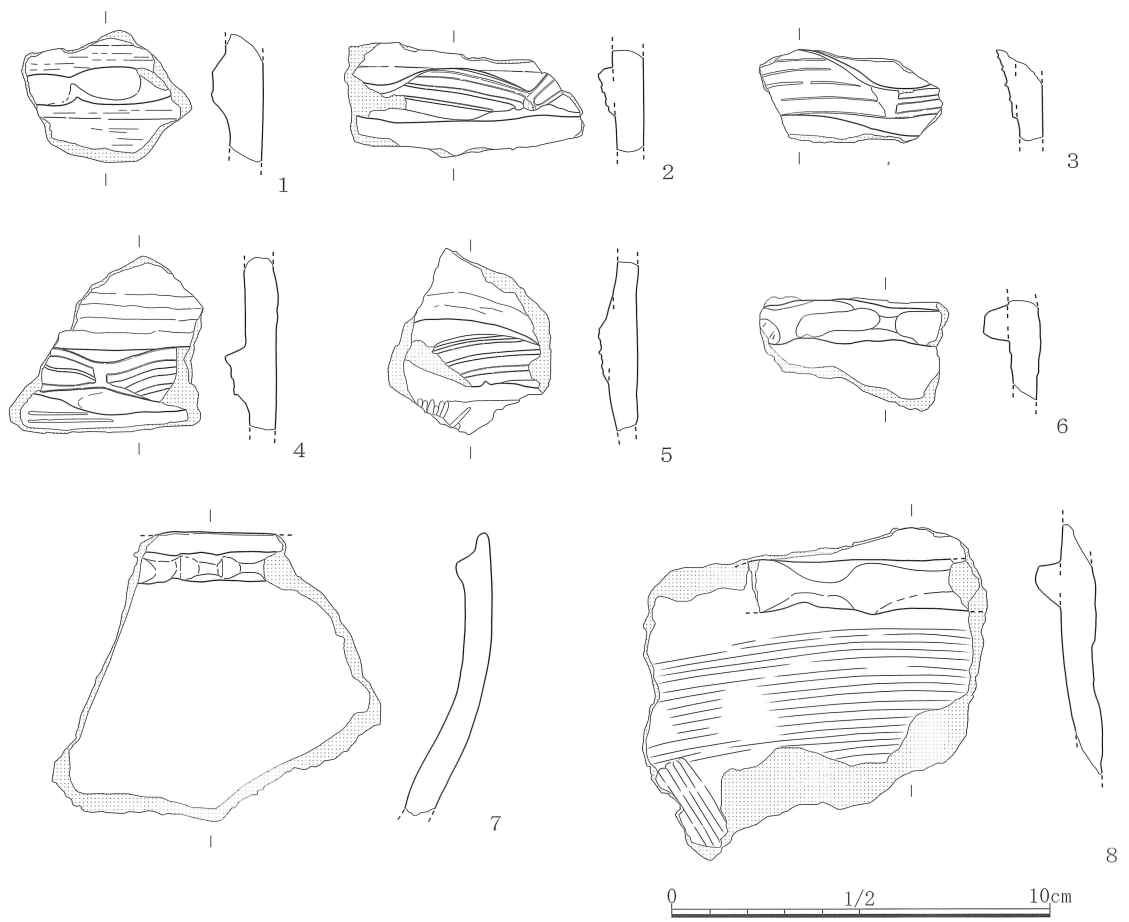
7は、第26トレンチの後世の盛土（II）から出土した。深鉢の口縁部である。口縁部先端から肩部にかけてが残存していた。器形は、肩部に屈曲をもち、口縁部径より肩部径の方が大きく、肩部径/口縁部径が1.10を超えらると思われるA類2型である。凸帯の施文位置は、口縁部直下に凸帯が付くA類である。肩部にも凸帯をもつかは欠損により不明である。口縁部形態は、口縁部凸帯より上の口縁部があまり外反しないA類で、口縁部形態は、面取りをおこなわないB類である。凸帯上の刻目は、施文原体が二枚貝の腹縁・外面以外のA類で、平面形態はD字形を呈するD類である。外面、内面ともに灰褐色を呈する。

8は、第8トレンチ土器棺内の黒色土内から出土した。後述する9の土器棺と同一個体であると思われる。凸帯文が残存していた。やや内彎している。肩部付近の凸帯文であると思われる。凸帯上の刻目は、施文原体が二枚貝の腹縁・外面以外のA類である。平面形態は横長のO字形を呈するO型と、D字形を呈するD類の間のような形態である。外面、内面ともに灰褐色を呈し、部分的に煤が付着する。

9は、第8トレンチから出土した。上半部は欠損していたが、下半部は原位置であった。出土状況の詳細は第8トレンチを参照いただきたいが、出土地点を囲うように掘形が検出されたことから、土器棺として用いられていた可能性がある。肩部～底部にかけてが残存していた。器形は、肩部に屈曲をもち、口縁部径より肩部径の方が大きく、肩部径/口縁部径が1.10を超えらると思われるA類2型である。肩部最大径は約45 cm、底部は径7.2 cmほどと小さい。外面の調整であるが、底部付近には縦方向を中心とするナデ、胴部には右斜め下から左斜め上方向へのケズリがほどこされる。肩部付近から上では右から左方向へのケズリがほどこされる。なお、胴部から肩部にかけてのケズリは徐々に角度が水平に変わっていき、切り合い関係があるというわけではない。外面の肩部～胴部にかけてには煤が付着している。内面の調整は、底部付近は不定方向のナデ、それよりも上は横ナデである。内面の胴部下側から底部にかけては煤が付着している。



第27図 能褒野墓 飛地ほ号、第29、30、31トレンチ平面図・断面図 (1/200、1/80)



- 1 (第7トレンチ)
- 2~5 (第8トレンチ流土)
- 6 (第9トレンチ)
- 7 (第26トレンチ)
- 8、9 (第8トレンチ土器棺)

第28図 能褒野墓 出土品実測図 (1) 縄文土器 (1~8は1/2、9は1/4)

以上の特徴からみて、これらは縄文時代晩期の五貫森式に位置づけられる深鉢と考えられる。(土屋)

(2) 弥生土器・土師器・埴輪 (第29図)

今回の事前調査では全体的に遺物の出土数は少なく、弥生土器・土師器・埴輪についてもその数は僅少である。第8・11・18・22・29トレンチで出土が確認されている。さらに、破片も小さいものが多く、かつ明確に遺構に伴うものは乏しい。以下に、図化したものを中心に述べる。

10・12・13は、弥生土器と考えられる。10は小型の鉢と考えられ、第22トレンチの流土から出土している。口径約9cm、高さ約5.5cmに復元される。茶褐色を呈し、指オサエや指ナデ調整が認められる。12は広口の壺と考えられ、第18トレンチ(域内陪冢ろ号)流土から出土している。口径約14cm、高さ約13cmに復元される。淡赤褐色～黄褐色を呈し、外面と口縁内面に粗いハケメが認められる。13は、第18トレンチ(域内陪冢ろ号)墳丘盛土から出土している。口径約13cmに復元される。淡赤褐色～黄褐色を呈し、外面と口縁内面に粗いハケメが認められる。11は、土師器高杯の脚部で、第11トレンチ(域内陪冢と号)の流土から出土している。杯部のほぼすべてと脚端部を欠いている。茶褐色を呈し、指ナデや板ナデ調整が認められる。14は埴輪の胴部で第8トレンチでの流土から出土した。突帯貼り付け箇所付近であるが、突帯は剥離している。接合面には方形刺突痕を確認できる。茶褐色を呈しており、これまでに確認されている能褒野墓に伴う埴輪と同じ特徴を持っている。そのほか同様の特徴をもつ底部や朝顔形埴輪口縁部の破片が見られ、第8トレンチでは集中的に埴輪片が確認できる。

これらの土器は、11のように域内陪冢に直接伴うと考えられるものがあるが、12・13のように墳丘盛土に含まれていたものも目に付く。おそらく、第8トレンチの土器棺のように古墳築造以前の同地には少なからず土器を伴う遺構が形成されており、それらが古墳築造に伴う土取りなどで墳丘盛土内に混入した状況を想定できるだろう。(清喜)

(3) 須恵器 (第30図、図版15)

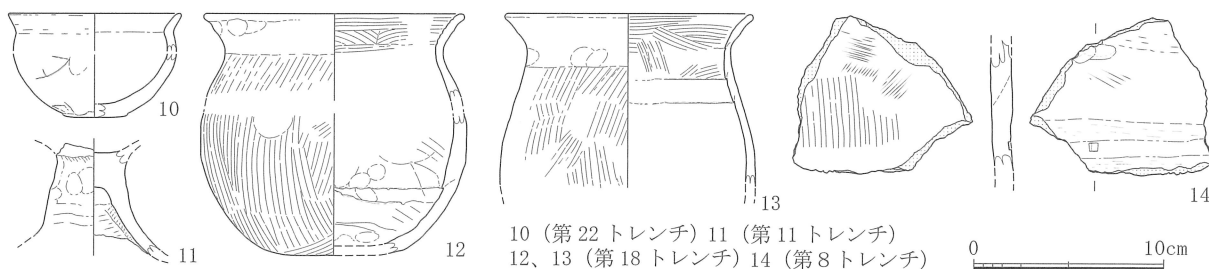
ここでは、ある程度まとまった状態で出土した第7トレンチの須恵器と各トレンチで出土した須恵器について述べる。

15は、第7トレンチの石室内埋土より出土した、器高4.6cm、器径14.3cm、口縁部径14.2cmの坏蓋である。外面調整には回転ヘラギリの後、下部に回転ナデを施す。内面調整には回転ナデを施す。回転ヘラギリは、器が上下逆転の状態、逆時計回りの回転方向に対してのものである。口縁端部には段を有する。色調は灰色で、焼成は良好である。

16は、第7トレンチの石室内埋土より出土した、器高4.7cm、器径13.8cm、口縁部径12cm、受部径13.1cmの坏身である。外面調整には回転ナデの後、下部に回転ケズリを施す。内面調整には回転ナデを施す。回転ケズリは、器が上下逆転の状態、逆時計回りの回転方向に対してのものである。口縁端部には段を有する。色調は灰色から暗灰色で、焼成は良好である。

17と18は、組み合った状態で石室床面直上より出土した坏蓋と坏身である。坏内部には、土壤中に土器の可能性のある破片が入っていたが、副葬当初より入っていたものかは不明である。

17は、器高4.4cm、器径13.1cm、口縁部径13cmの坏蓋である。外面調整には回転ヘラギリの後、上部に回転ケズリと下部に回転ナデを施す。内面調整には回転ナデを施す。回転ヘラギリは、器が上下逆転の状態



第29図 能褒野墓 出土品実測図 (2) 弥生土器・土師器実測図 (1/4)

で、逆時計回りの回転方向に対してのものである。口縁端部には段を有する。色調は灰色から暗灰色で、焼成は良好である。

18は、器高4.5 cm、器径13.7 cm、口縁部径11.2 cm、受部径12.6 cmの坏身である。外面調整には回転ヘラギリの後、上部に回転ナデと下部に回転ケズリを施す。内面調整には回転ナデを施す。回転ケズリは、器が正位置の状態、逆時計回りの回転方向に対してのものである。口縁端部は丸く収める。色調は灰色で、焼成は良好である。

19は、第7トレンチの石室内埋土より出土した、残存高2.7 cm、残存長4.9 cmの坏蓋片である。外面調整には回転ナデの後、回転ケズリを施す。内面調整には回転ナデを施す。色調は淡褐色で、焼成は不良である。回転ケズリの範囲が狭いことから坏蓋と考えたが、小片のため坏身の可能性もある。

20は、第29トレンチの流土より出土した、残存高1.1 cm、残存長3.8 cmの坏身片である。外面調整には回転ヘラギリの後、回転ナデを施す。内面調整には回転ナデを施す。色調は灰白色から灰色で、焼成は不良である。坏身として報告するが、小片のため坏蓋の可能性もある。

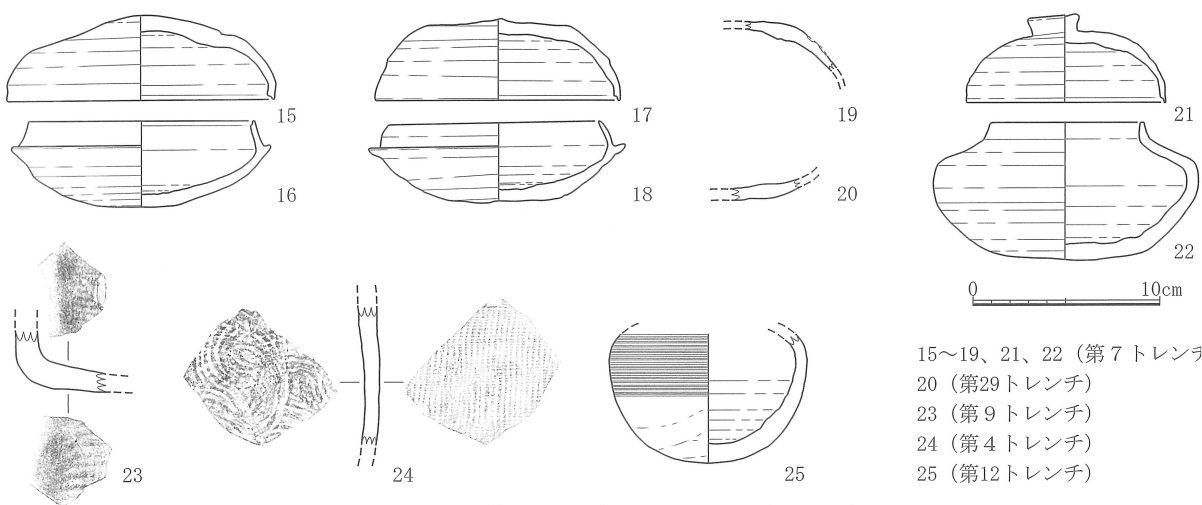
21は、第7トレンチの石室内埋土より出土した、器高4.8 cm、口縁部径10.6 cmの壺蓋である。頂部に逆台形つまみを有する。外面調整には回転ナデの後、上部に回転ケズリを施す。頂部につまみを付ける際の回転ナデによって、回転ケズリの痕跡は一部消されている。内面調整には回転ナデの後、上部に不定方向のナデを施す。回転ケズリは、器が正位置の状態、逆時計回りの回転方向に対してのものである。口縁端部には段を有する。色調は暗灰色で、焼成は良好である。22の蓋という可能性もあるが、色調および口縁部の大きさに差がある。

22は、第7トレンチの石室床面直上より出土した、器高7.4 cm、器径14.2 cm、口縁部径8.1 cmの短頸壺である。外面調整には回転ナデの後、下部に回転ケズリを施す。内面調整には回転ナデを施す。回転ケズリは、器が上下逆転の状態、逆時計回りの回転方向に対してのものである。口縁端部には面を有する。色調は灰色で、焼成は良好である。口縁端部が一部細かく割れているが、意図してされたものかは不明である。

23は、第9トレンチの流土より出土した、残存高3.3 cmの甕頸部片である。外面にはタタキ痕、内面には当具痕が薄く残る。色調は灰色から灰褐色で、焼成は良好である。

24は、第4トレンチの表土より出土した、残存長7.5 cmの甕体部片である。外面にはタタキとカキメ痕、内面には当具痕が残る。色調は暗灰色で、焼成は良好である。

25は、第12トレンチの周溝埋土直上より出土した、残存高6.9 cm、器径10.5 cmの甕か壺の底部である。外面調整は上部にカキメ、下部にナデを施す。内面調整には回転ナデを施す。回転ナデは、器が正位置の状態、逆時計回りの回転方向に対してのものである。色調は灰色から暗灰色で、焼成は良好である。(横田)



15~19、21、22 (第7トレンチ)
20 (第29トレンチ)
23 (第9トレンチ)
24 (第4トレンチ)
25 (第12トレンチ)

第30図 能褒野墓 出土品実測図 (3) 須恵器 (1/4)

4 調査成果の検討

(1) 墳丘築造の方法について

墳丘盛土が確認されたトレンチ 今回の調査において、多くのトレンチで墳丘盛土の状況が観察できた。観察できたのは、第9（域内陪冢ち号）、10～12（域内陪冢と号）、14（域内陪冢へ号）、15・16（域内陪冢ほ号）、17・18（域内陪冢ろ号）、20・21（域内陪冢い号）、25～28（飛地に号）、29～31（飛地ほ号）の各トレンチである（以下、域内陪冢については単に陪冢ち号などと略記する）。

墳丘築造（盛土）の工程と特徴 墳丘築造開始面は、第9トレンチの盛土で旧表土の可能性が考えられる以外は、盛土の前にいったん地表面を削ってある程度の整地をおこなっているようである。整地面の高さは、トレンチ内での最高検出面でおおむね標高46.2m～45.4mの範囲で確認された。全体に平坦な地形上に築かれていることがよくわかる。以下、盛土の特徴で分けて記述したい。

①整地面上の比較的薄い盛土層（あるいは旧表土か）を介して、第1段階として比較的単位の大きな盛土をおこなう。黒褐色土の盛土が主体をなすが、その中に異なる色調の盛土がブロック状に入る例が多い。第2段階の盛土は、第1段階の盛土の上位かつ墳丘中心寄り（内法部分）に厚さ5～20cmの盛土が互層を形成する。埋葬施設の構築と連動する裏込としての位置づけができようか。盛土の工程に画期が認められる点に特徴がある。

該当する主なトレンチは、第9・10・14・15・17・31などであるが、第18トレンチは特徴①に含みうる。

②黒褐色土主体の単位の大きな盛土が認められず、地山整地面上に特徴①における第2段階の盛土が直接おこなわれている。比較的整然と積まれたものもあれば（第18・21トレンチ）、やや不規則に積まれたものもある（第21トレンチ）。盛土工程上の画期は認められないようである。

該当する主なトレンチは、第18・20・21・25～28である。

以上、盛土の特徴で分けた。特徴①の盛土が認められた墳丘の数が多くを占めているが、特徴②は、特徴①の第1段階の盛土が省略されたものと考えられることができる。色調（土質）の異なる盛土を交互に積み上げることによって共通しているといえよう。この盛土層は、色調でみると黒褐色土で大きな単位のものを除き、そのほかは全体として意識的に異なる色調の土を交互に盛土している。土質については、色調ごとでそれほど違いがあるようには観察されなかったが、築造にあたっては何らかの有用性を認めて使い分けていたものと考えられる。

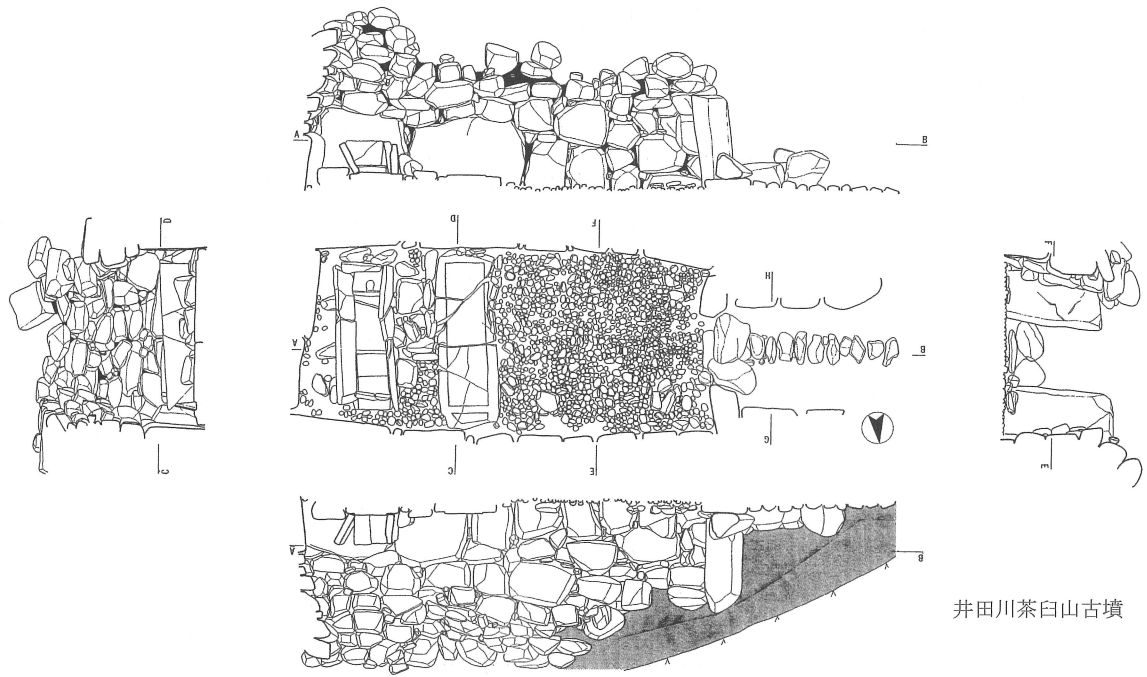
盛土の評価 ここまでみてきたように、個別のトレンチで比較すると、盛土の類似や相異が認められる場合がある。しかし、実際は同一墳丘内においても、トレンチによって盛土の様相が異なっているものがみられた（第17・18トレンチ：陪冢ろ号）。つまり、あるトレンチの様相をもって、その墳丘の盛土の特徴とすることは若干保留すべき点が残るということである。1墳丘内でも場所によっては少しずつ盛土の特徴が異なることも考慮しておく必要があるだろう。

よって、これらの盛土の様相をひとまず大きく捉えると、その特徴はひとつのまとまりとすることができよう。今後調査事例が蓄積されていけば、盛土の細かい差において分類が可能かどうか、さらには分類によるまとまりの関係性などについて検討できる可能性がある。（清喜）

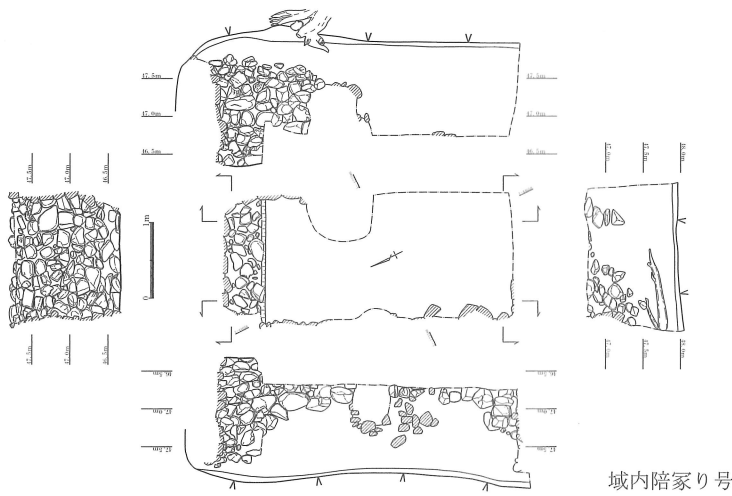
(2) 域内陪冢り号の横穴式石室について

第7トレンチで検出された域内陪冢り号（以下、「り号」という）の横穴式石室について、周囲の例との比較から、その特徴について述べる。

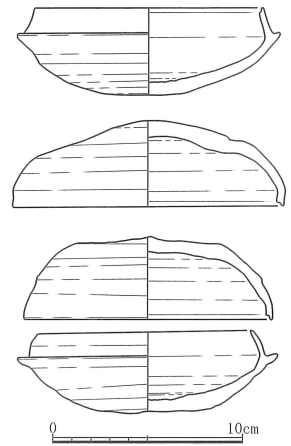
遺物からみた年代 周囲との比較の前に、り号の年代について、石室内出土の須恵器坏身・坏蓋を、対象地域は異なるが、便宜的に田辺昭三の陶器編年²³⁾と比較することから考えてみたい。まず、第30図-2はTK10型式期（6世紀中葉頃）の資料と類似し最も古い。次いで、第30図-1は口縁端部に段を有し、一部にやや古い形状を残すものの、TK43型式期（6世紀後葉頃）の資料と類似することから、第30図-2に次ぐものである。さらに、第30図-3・4は、3の坏蓋口縁端部に段を有し、4の坏身口縁部の立ち上がりが高く、一部にやや古い形状を残すものの、双方TK209型式期（6世紀末から7世紀前葉頃）の資料



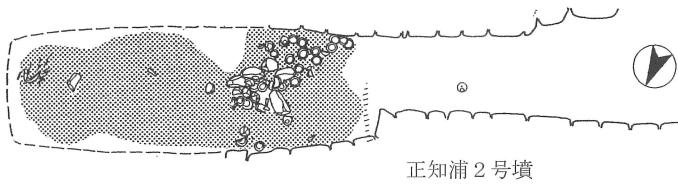
井田川茶臼山古墳



城内陪冢り号



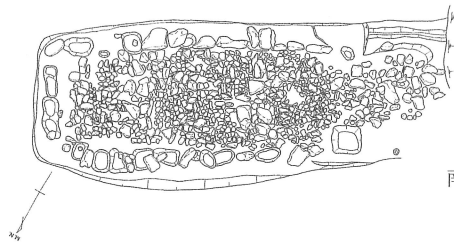
城内陪冢り号出土須恵器坏



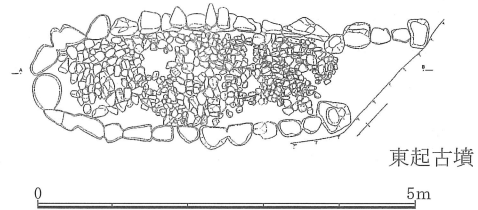
正知浦2号墳



西野8号墳



南山6号墳



東起古墳

第31図 能褒野墓 城内陪冢り号と周辺の横穴式石室 (1/100、須恵器のみ1/4)

と類似することから、第30図-1に次ぐものである。このことから、須恵器坏については第30図-2、1、3(4)という順に古いことがわかる(第30図)。

り号は、石室床面まで掘削した範囲が奥壁から50cmの幅に限られるため、当然未掘削の箇所により古い時期の遺物が含まれていることも考えられるが、現在確認されている遺物の中で最も古相の第30図-2より、少なくとも6世紀中葉頃には築造され、第30図-1、3(4)より、6世紀後葉頃と7世紀前葉頃に追葬がおこなわれたと考えておきたい。

周辺古墳との比較 り号の石室は、奥壁と側壁が直角ではなく、奥壁から側壁へと斜めに広がるようにつながることから、玄室がやや胴張りの平面形であったと考えられる。り号と同じ亀山市内の横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳で、石室を図面で確認できたものと比較してみると、井田川茶白山古墳⁽²⁴⁾は6世紀前葉頃に築造され、り号とは石室構造・石室規模ともに類似しないが、井田川茶白山古墳も玄室は若干胴張りの平面形になっている。

そうした胴張りの玄室をもつ横穴式石室で、同規模のものとしては、亀山市の正知浦2号墳⁽²⁵⁾、鈴鹿市の南山6号墳⁽²⁶⁾があり、り号のものよりはやや新しい時期の須恵器を出土している。ただし、双方ともに残存状況が良くないため、り号との比較は難しい

他にり号の石室と同じ胴張りの玄室に石敷をもつものとしては、地理的にやや離れるが、四日市市の西野20号墳⁽²⁷⁾、東起古墳⁽²⁸⁾がある。それらは出土遺物からみる限り、り号よりは新しい6世紀後葉から7世紀前葉頃の古墳である。双方の玄室は、り号のものとは比べると奥壁から側壁にかけてより広がっている。

比較資料が少ないものの、り号の石室についてまとめると、胴張りの玄室をもつこの地域一帯の古墳中では、井田川茶白山古墳に次いで古いもので、玄室の胴張り具合は新しい時期のものとは比べてやや狭いといえることができる。(横田)

まとめ

調査の所見 今回の調査では、主に域内陪冢や飛地が点在する境界線沿いでおこなった。このことにより、能褒野墓そのものに関する所見は少ないものであったが、第8トレンチで埴輪片を確認した。また、新たに25cm間隔の等高線で測量をおこなった結果、後円部において平坦面を確認した。これにより、少なくとも後円部については2～3段築成であることが判明した。

一方、域内陪冢や飛地については、第7トレンチ(域内陪冢り号)で、南面する横穴式石室を確認したことは特筆される。奥壁を中心とする範囲のみの遺存であったが、床面近くで一定量の須恵器が出土したことで、域内陪冢に関する貴重な情報を得ることができた。また、その他の域内陪冢においては、墳丘盛土の状況を把握できるトレンチが複数確認できたことにより、今後周辺の古墳との関係性についても検討を進めていけるものと考えている。

工事の方法 現在、調査成果を踏まえて、侵入防止の目的を達しつつ能褒野神社境内地に隣接するという景観とのバランスを考えて、工法を検討中である。特に、境界線沿いには第7トレンチで確認された横穴式石室も存在するため、遺構の保護も重要な課題として検討を進めていく予定である。(清喜・横田・土屋)

註

- (1) 小林秀樹「概説」『近世「のほの」考～江戸時代の人々が見たヤマトタケル墓～』、亀山市歴史博物館、1999年。
- (2) 吉村利男「明治期の能褒野墓治定と修補」『三重の古文化』81、三重郷土会、1999年。
- (3) 「皇親御陵墓取調届」『太政官 公文録』明治2年第113巻(国立公文書館蔵、請求番号：本館-2A-009-00・公00183100)。
- (4) 「日本武尊御陵墓届」『太政官 公文録』明治2年第109巻(国立公文書館蔵、請求番号：本館-2A-009-00・公00179100)。
- (5) 「三重県史稿 政治部 祭典」『三重県史料』明治5-12年(国立公文書館蔵、請求番号：府県史料三重)。
- (6) 『能褒野墓實檢勘註』明治10年(宮内公文書館所蔵、識別番号：40255)。
- (7) 『日本武尊御陵墓修繕書類 庶務課』明治15年(三重県総合博物館所蔵、資料番号：KB0018123)。

- (8) 註(5)に同じ。
- (9) 註(6)に同じ。
- (10) 註(2)に同じ。
- (11) 註(7)に同じ。
- (12) 註(6)に同じ。
- (13) 『日本武尊御墓図/明治写』(宮内公文書館所蔵、識別番号:33189)。
- (14) 「王塚立形之図式」『日本武尊御墓改定御達ニ付取調書』明治12年11月13日(三重県総合博物館所蔵、資料番号:KM0004052)。
- (15) 「田村之内名越里字女ヶ阪」『日本武尊御墓改定御達ニ付取調書』明治12年11月13日(三重県総合博物館所蔵、資料番号:KM0004051)。
- (16) 「立形見取絵図」『日本武尊御墓改定御達ニ付取調書』明治12年11月13日(三重県総合博物館所蔵、資料番号:KM0004049)。
- (17) 「田村之内名越里字女ヶ阪旧字王塚」『日本武尊御墓改定御達ニ付取調書』明治12年11月13日(三重県総合博物館所蔵、資料番号:KM0004048)。
- (18) 「日本武尊御陵」『日本武尊斎王隆子息速別命御墓測量図并ニ野帳入』明治20年2月(三重県総合博物館所蔵、資料番号:KM0004074、KM0004075)。
- (19) 亀山市編『亀山市史』考古編、2011年。
- (20) 三重県教育委員会編『井田川茶臼山古墳』三重県埋蔵文化財調査報告26、1988年。
- (21) 第6トレンチの報告箇所では述べるが、標高44.8mは旧地形に対する改変1回目の床面の高さと同じである。この高さはどう考えるかにより、能褒野墓築造時の地形などの評価は変わることになる。
- (22) 鈴木克彦「伊勢湾沿岸地方における凸帯文深鉢の様相－伊勢地方からの視点－」『三重県史研究』第6号、三重県、1990年。
- (23) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981年。
- (24) 註(20)に同じ。
- (25) 三重県埋蔵文化財センター編『上椎ノ木古墳群・谷山古墳・正知浦古墳群・正知浦遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告100-1、1992年。
- (26) 鈴鹿市教育委員会編『南山遺跡・南山6号墳』鈴鹿市埋蔵文化財調査報告9、1991年。
- (27) 四日市市遺跡調査会編『西野遺跡・西野古墳群』四日市市遺跡調査会文化財調査報告書19、2003年。
- (28) 四日市市遺跡調査会編『東起古墳』四日市市遺跡調査会文化財調査報告書12、1997年。



1 第7トレンチ 全景（南から）



2 第7トレンチ 須恵器出土状況（南から）



1 第7トレンチ 東壁（西から）



2 第7トレンチ 西壁（東から）



3 第7トレンチ 東壁近景（西から）



4 第7トレンチ 西壁近景（東から）



5 第7トレンチ 奥壁（南から）



6 第7トレンチ 南壁（北から）



7 第7トレンチ 敷石（南から）



8 第7トレンチ 域内陪冢り号（東から）



1 第9トレンチ 域内陪冢ち号（北から）



2 第9トレンチ 全景（南から）



1 第9トレンチ 南壁（北から）



2 第9トレンチ 東壁（西から）



3 第9トレンチ 西壁（東から）



4 第9トレンチ 周溝（西から）



5 第9トレンチ 周溝（東から）



1 第13トレンチ 全景（北から）



2 第13トレンチ 西壁（東から）



1 第14トレンチ 域内陪冢へ号（北から）



2 第14トレンチ 墳丘上部盛土（東から）



3 第14トレンチ 墳丘下部盛土（東から）



4 第14トレンチ 西壁（南東から）



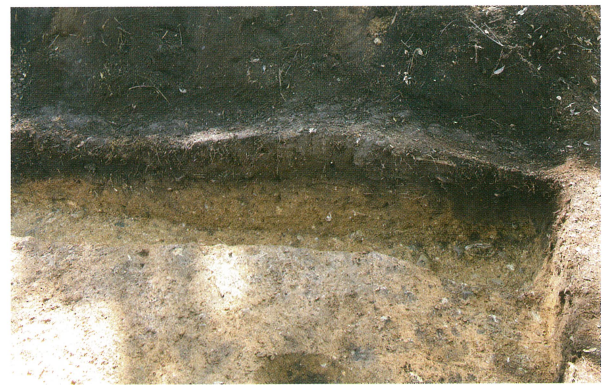
5 第14トレンチ 周溝（東から）



1 第 15 トレンチ 全景 (西から)



2 第 15 トレンチ 断割東部 (北から)



3 第 15 トレンチ 断割西部 (北から)



4 第 15 トレンチ 周溝 (南から)



5 第 15 トレンチ 域内陪冢ほ号 (西から)



1 第16トレンチ 全景（北から）



2 第16トレンチ 西壁（北東から）



3 第16トレンチ 東壁（北西から）



4 第16トレンチ 断割（北東から）



5 第16トレンチ 域内陪冢ほ号（北から）



1 域内陪冢ろ号 第17、18トレンチ全景（北東から）



2 第17トレンチ全景（北東から）



3 第17トレンチ墳頂西壁（東から）



4 第17トレンチ墳裾西壁（東から）



1 第18トレンチ全景（東から）



2 第18トレンチ墳頂北壁（南から）



3 第18トレンチ墳裾北壁（南から）



4 域内陪冢い号 第20、21トレンチ全景（南から）



1 第20トレンチ全景（南東から）



2 第20トレンチ墳頂北壁（南西から）



3 第20トレンチ墳裾北壁（南西から）



4 第21トレンチ全景（南西から）



5 第21トレンチ墳頂東壁（西から）



6 第21トレンチ墳裾東壁（西から）



1 第7トレンチ 須恵器坏蓋



3 第7トレンチ 須恵器坏蓋



2 第7トレンチ 須恵器坏身



4 第7トレンチ 須恵器坏身



5 第7トレンチ 須恵器蓋



7 第7トレンチ 須恵器底部



6 第7トレンチ 須恵器短頸壺



8 第4、9トレンチ 須恵器甕



1 能褒野墓 遠景（南西から）



2 域内陪冢い号（北東から）



3 域内陪冢ろ号（東から）



4 域内陪冢い・ろ号（西から）



5 域内陪冢は号（北東から）



1 域内陪冢に号（北から）



2 域内陪冢ほ号（北東から）



3 域内陪冢へ号（東から）



4 域内陪冢と号（北東から）



5 域内陪冢ち号（西から）



6 域内陪冢り号（東から）



7 飛地に号（西から）



8 飛地ほ号（南から）



1 第1トレンチ 全景（北西から）



2 第1トレンチ 全景（南東から）



3 第1トレンチ南壁東端付近（北東から）



4 第1トレンチ 南壁土堤付近（北東から）



5 第1トレンチ 西端部東壁（北西から）



6 第1トレンチ 西端部全景（北から）



1 第2トレンチ 完掘全景（北西から）



2 第2トレンチ 完掘全景（北から）



3 第2トレンチ 東壁（北西から）



4 第2トレンチ 南壁（北東から）



5 第3トレンチ 西壁（東から）



6 第3トレンチ 西壁〔詳細〕（東から）



7 第3トレンチ 南壁（北から）



1 第4トレンチ 拡張前全景（北西から）



2 第4トレンチ 拡張前全景（南東から）



3 第4トレンチ 拡張後石敷全景（北東から）



4 第4トレンチ 拡張後石敷全景（西から）



5 第4トレンチ 拡張後石敷全景（南東から）



6 第4トレンチ 拡張後全景（南東から）



1 第4トレンチ 完掘全景（北から）



2 第4トレンチ 石列東端付近（南西から）



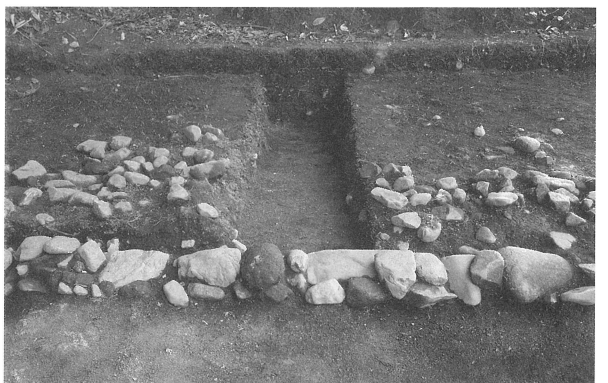
3 第4トレンチ 石列西端付近（北西から）



4 第4トレンチ 石敷整地層（北東から）



5 第4トレンチ 北壁中央（南西から）



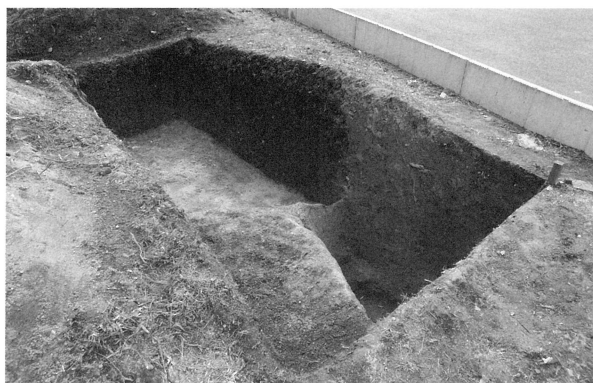
6 第4トレンチ 石敷断割箇所（北東から）



7 第4トレンチ石敷断割西壁（南東から）



8 第4トレンチ石列の状況（南西から）



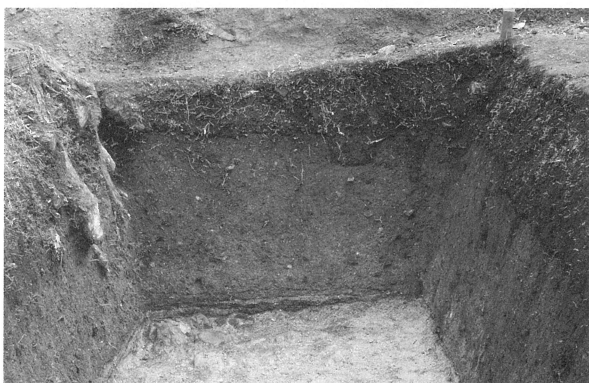
1 第5トレンチ 全景（東から）



2 第5トレンチ 東壁（北西から）



3 第5トレンチ 西壁（南東から）



4 第5トレンチ 南壁（北東から）



5 第6トレンチ 全景（北東から）



6 第6トレンチ 西壁北半部（南から）



7 第6トレンチ 西壁中央付近（南東から）



1 第8トレンチ 全景 (南西から)



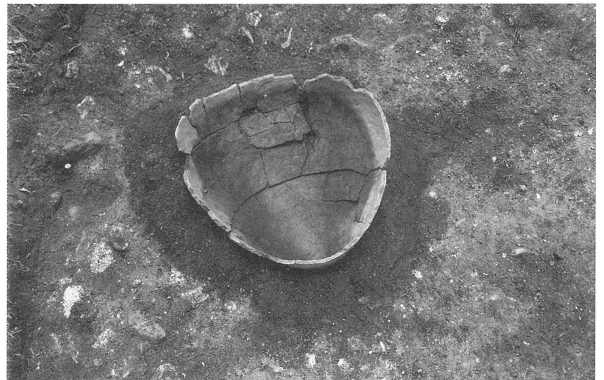
2 第8トレンチ 西壁北半部 (東から)



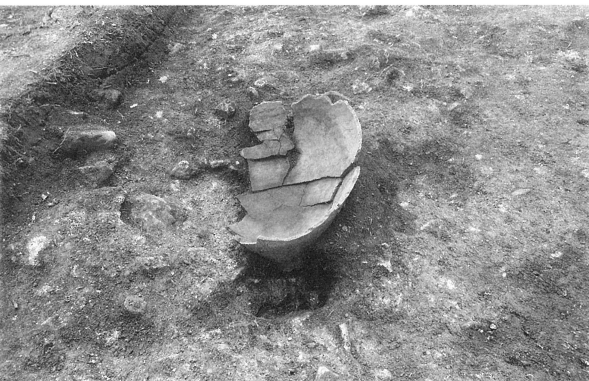
3 第8トレンチ 西壁南半部 (南東から)



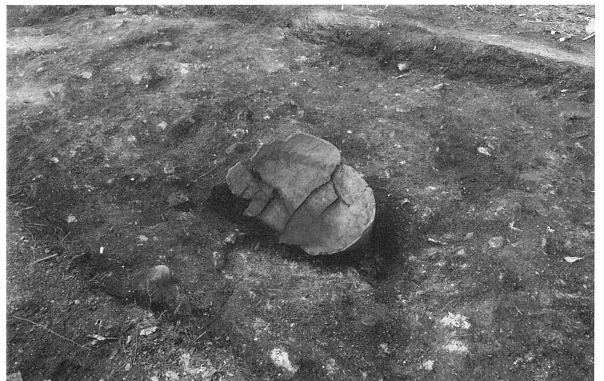
4 第8トレンチ 土器棺内埋土 (南西から)



5 第8トレンチ土器棺内完掘 (南西から)



6 第8トレンチ土器棺掘方内半裁 (南西から)



7 第8トレンチ土器棺掘方内半裁 (西から)



1 第10トレンチ 完掘全景（北から）



2 第10トレンチ 南壁（北から）



3 第10トレンチ 南壁盗掘坑（北東から）



4 第10トレンチ 南壁墳丘盛土（北東から）



5 第10トレンチ 南壁墳丘盛土（北から）



6 第10トレンチ全景〔平面検出〕（西から）



7 第10トレンチ土層平面検出（北西から）



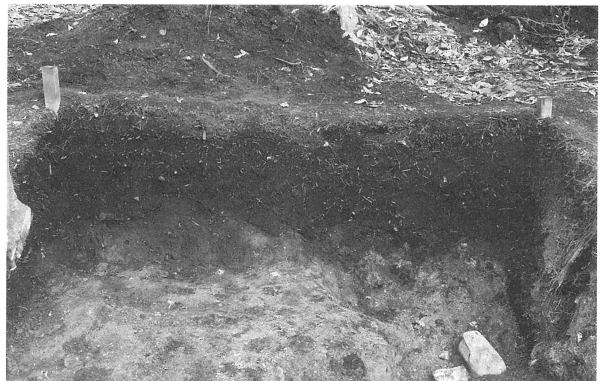
1 域内陪冢と号第 11 トレンチ全景 (北東から)



2 第 11 トレンチ 全景 (東から)



3 第 11 トレンチ 東壁 (北西から)



4 第 11 トレンチ 南壁 (北から)



5 域内陪冢と号第 12 トレンチ全景 (南東から)



6 第 12 トレンチ 西壁 (南東から)



7 第 12 トレンチ 南壁 (東から)



8 第 12 トレンチ 南壁〔周溝〕(北東から)



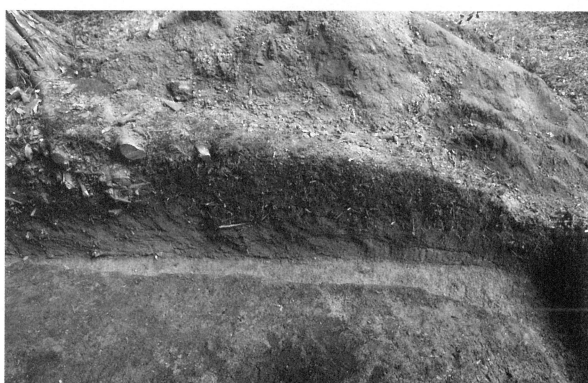
1 第19トレンチ全景（東から）



2 第22トレンチ全景（南から）



3 第22トレンチ東壁北側（西から）



4 第22トレンチ東壁南側（西から）



1 第23トレンチ全景（南東から）



2 第24トレンチ全景（北東から）



3 飛地に号 第25、26、27、28トレンチ全景（南西から）



1 第25トレンチ全景（北西から）



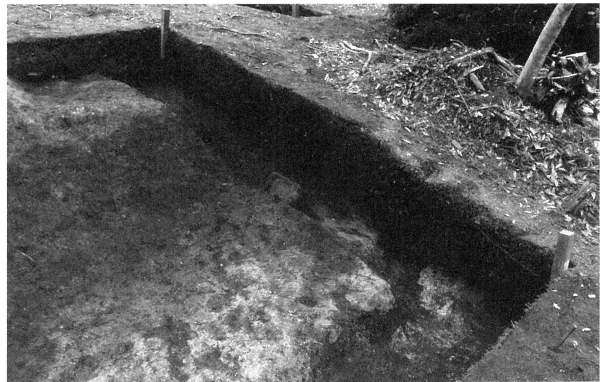
2 第25トレンチ北壁（西から）



3 第25トレンチ南壁（北から）



4 第26トレンチ全景（北東から）



5 第26トレンチ西壁（東から）



6 第26トレンチ西壁墳頂付近（東から）



1 第 27 トレンチ全景 (東から)



2 第 27 トレンチ全景北壁 (南から)



3 第 27 トレンチ墳頂西壁 (東から)



4 第 28 トレンチ全景 (南西から)



5 第 28 トレンチ北壁 (南西から)



6 第 28 トレンチ東壁 (西から)



1 飛地ほ号 第29、30、31トレンチ全景（東から）



2 第29トレンチ全景（西から）



3 第29トレンチ東壁（西から）



4 第29トレンチ南壁（北から）



1 第30トレンチ全景（北東から）



2 第30トレンチ南壁（北東から）



3 第30トレンチ西壁（東から）



4 第31トレンチ全景（南東から）



5 第31トレンチ墳頂西壁（南から）



6 第31トレンチ墳裾西壁（南から）



縄文土器 (1～8は1/2、9は1/4)